

京都府埋蔵文化財情報

第117号

美濃山廃寺第6次発掘調査の成果と

銅溶解遺構の概要について-----	伊野近富・関廣尚世-----	1
国宝清水寺本堂の調査-----	引原茂治-----	7
あかりをつけましょ(上)ー灯火器の実証実験ー-----	牧田梨津子-----	11
平成23年度発掘調査略報-----		15
5. 野条遺跡第19次		
6. 長岡京跡左京第547次		
7. 山崎津跡第18次		
8. 椋ノ木遺跡第10次		
9. 木津川河床遺跡第22次		
10. 長岡京跡右京第1024次		
発掘余話第6回 遺跡・遺構の物差しにならなかった出土品-----		24
研究ノート 桂川右岸地域における古墳時代集落の動向(2)-----	古川 匠-----	30
長岡京跡調査だより・113-----		36
普及啓発事業-----		38
「関西考古学の日」関連事業を振り返って-----		40
センターの動向-----		41

2012年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

美濃山廃寺第6次発掘調査の成果と 銅溶解遺構の概要について

伊野近富・関廣尚世

1. はじめに

美濃山廃寺は八幡市美濃山古寺に所在する。この美濃山廃寺のある八幡市は、古代において山城国と河内国との境にあたり、木津川・宇治川・桂川という三川が合流する地点に位置することから、河川交通や陸上交通の要衝の地でもあった（第1図）。

今回、発掘調査を実施した美濃山廃寺は美濃山丘陵上の平坦地（標高46～48m）に立地する。周辺の斜面には古墳時代後期の横穴群（荒坂・女谷横穴群など）が集中し、2～4km離れた地点に奈良時代からの寺院である西山廃寺、志水廃寺もある。また、美濃山では瓦が散布することから、古くから「美濃山廃寺」と呼ばれていた。

平成11～15年度に実施された八幡市教育委員会による範囲確認調査で、遺跡北部で東西復元長約93mを測るSD167が断続的に見付き、東西両端で南に屈折することが確認された（第2図）。このためこれが寺域を示す区画溝として推定されている。しかし、掘立柱建物群が広範囲にわたって確認されたが、礎石建物やそれに伴う基壇などが検出されず、遺構の上からは、寺院としての積極的な評価は難しい。一方で、多量の瓦や仏具と考えられる土器・土製品が出土しており、奈良時代から平安時代初期にかけての寺院跡として考えざるを得ない状況である。

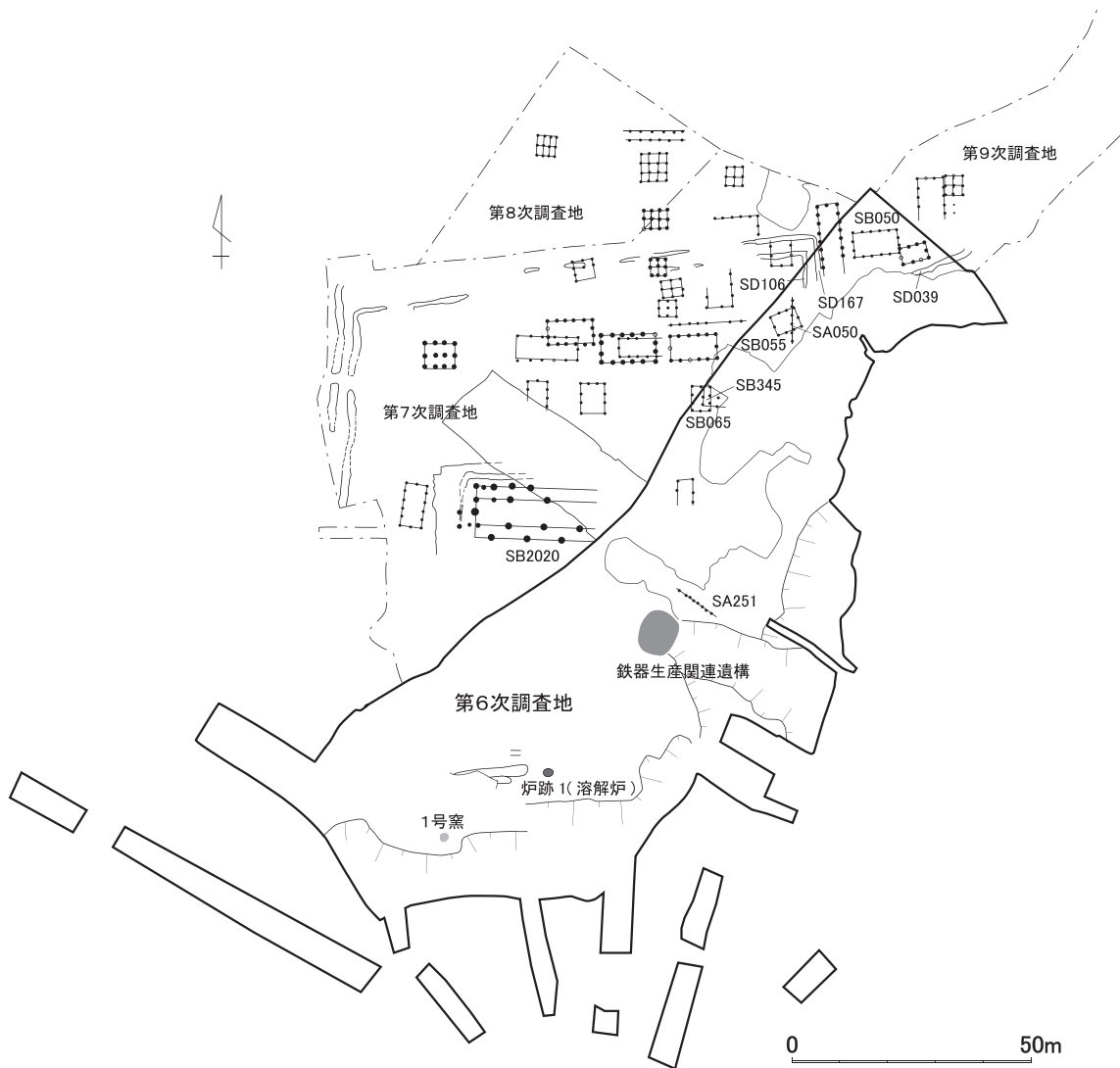
本稿で主に報告するのは本年度実施した遺跡の東半部を対象とした第6次調査で、新名神高速道路建設が調査原因である。調査面積は6,800㎡である。

2. 調査成果の概要

調査前は一帯が竹林であった。伐採した後、トレンチを設定し、重機により慎重に掘削を進めた。その結果、地表面から深さ約1mの範囲には竹林による土入れが全体に及んでいること、遺構は調査地全体で単発的に確認され、調査地東側と南側が大きく削平をうけているような状況であった。上述の八幡市教育委員会の調査による93m四方の寺域を想定した場合、今回の調査地はその南東半部に当たる。



第1図 美濃山廃寺位置図
(国土地理院 1/50,000 京都西南部)



第2図 美濃山廃寺遺構配置図

遺構は区画溝跡・柵列跡・掘立柱建物跡群・土坑・鉄器生産関連遺構・青銅器生産関連遺構・瓦窯跡（1号窯）を確認した。区画溝の大部分と掘立柱建物群の大半は、第6次調査区の北西側に隣接する第7次調査区へと続くものである。また、区画溝と考えられるSD 167に平行してSD 106を検出し、区画溝が二重であったことが判明した。1号窯は燃焼部のみが残存する窖窯で、燃焼部と焼成部の境の階部分にほぼ完形的美濃山廃寺Ⅰ類の軒平瓦がはりついた状態で検出された。

出土遺物は、飛鳥時代後半（7世紀後半）以降のものが多量に出土した。

土器は、須恵器と土師器が中心で、器種は杯や皿、および蓋が多数を占めるが、鉄鉢形や漆の運搬具やパレットに用いられた須恵器も出土した。土製品では、覆鉢形土製品や相輪状土製品が出土した。瓦は、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土した。軒丸瓦は、八幡市教育委員会による分類でⅠ・Ⅱ・Ⅳ類に相当するものが出土した。軒平瓦は、波状文をもつⅠ類が出土した。ヘラによる刻みでa類とb類とに分かれるが、いずれも出土した。また、重弧文であるⅡ類も出土した。

今年度は、八幡市教育委員会がおこなった第8次調査を含め、第6次調査から第9次調査までを実施し、調査で検出した遺構の重複関係・遺物の年代の検討から、美濃山廃寺を3時期（第Ⅰ期～第Ⅲ期）に大別した。

第Ⅰ期：飛鳥時代後半～奈良時代前半（7世紀後半～8世紀前半）

第Ⅱ期：奈良時代中頃（8世紀中頃）

第Ⅲ期：奈良時代後半（8世紀後半～9世紀前半）

次項では第Ⅱ期に属し、第6次調査の代表的な遺構として銅の溶解炉跡と推測される炉跡1とその出土遺物について述べてみたい。（伊野近富）

3. 炉跡1について

1) 炉跡1の位置と概要

美濃山廃寺の中心的建物である可能性が高いS B 2020から南へ約46m、緩斜面に形成されたくぼ地で炉跡を1基確認した（第3図）。南北75cm、東西45cm程の範囲内に焼土や炉壁が集中することからこの範囲内に築炉されたと考えられる。炉そのものは作業後破壊されているため、上部構造の詳細は不明であるが、出土遺物に砂が多く混じり椀状をなす炉底壁と、スサが多く混じる炉壁が認められ、その形状や大きさなどから小型の甑炉であった可能性が高い。また、羽口部分の可能性もあるものも出土している。

くぼ地には炉築以前に丸瓦や平瓦が多数投棄されており、その上層西端に炉を築いている。また、炉東側で炉を壊した時に掻き出されたと考えられるカラミと大量の炭を検出し、銅塊や銅湯玉なども散見された。これらの出土遺物やカラミの質と量などから、この炉跡は銅の溶解を行っていた遺構と推測され、坩堝が出土していないことから甑炉を直接開放型の鑄型に傾ける手法が



第3図 炉跡1およびその周辺の遺物出土状況

想定される。また、出土した銅塊には木炭が噛んだものも認められた。

炉跡周辺を再々精査したにもかかわらず、炉に伴う覆屋などは検出されなかった。炉周辺の焼土の広がりも考え合わせると、覆屋を伴わない小規模・短期の操業であったと考えられる。次に炉 1 とその周辺から出土した冶金関連以外の遺物について述べる。

2) 出土遺物

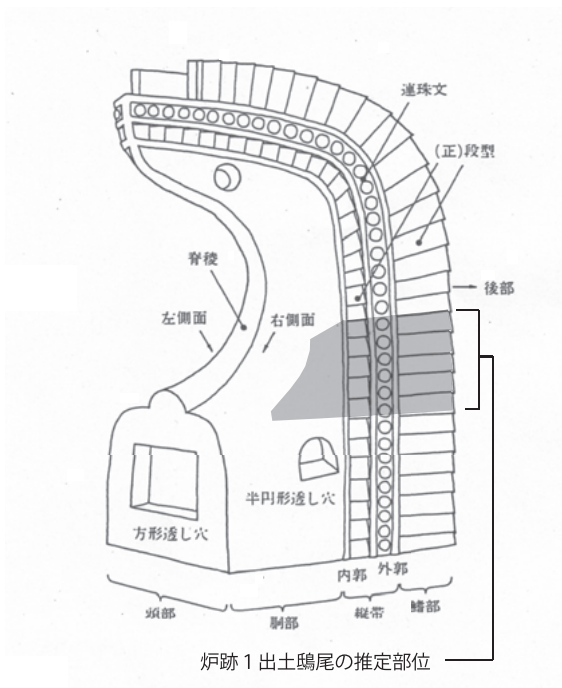
炉跡 1 内からは多数の瓦や土器とともに博仏・鴟尾・鬼瓦・ひさご形土製品が出土した。博仏は、整理作業で炉内埋土を水洗中に発見したが、鬼瓦は築炉以前にくぼ地に投棄された瓦層から、鴟尾とひさご形土製品は、溶解炉廃絶後に投棄した出土状況を示していた。



第 4 図 美濃山廃寺出土博仏

博仏は、残存長 1.9cm、残存幅 1.8cm、厚さ 0.5cm を測り、方形板状であったと推測できる。天蓋と光背を備えた如来坐像と考えられ、蓮華座に座す。また、右端部と上端部が残存するなかに一体分が表されることから多尊像であったと考えられる（第 4 図）。同様の如来坐像が表現されたものとして、大阪府枚方市百済寺の四尊像、兵庫県朝来郡法興寺跡出土の六尊像がある。

鴟尾（第 5 図）は、一部腹部が残存する胴部から鰭部にかけての破片で、残存長 25.2cm、幅 35cm、鰭部の厚さ 3.1～4.7cm、側面の厚さが 6.3cm 前後、腹部の厚さ 6cm 前後を測る。幅 1.4～1.6cm の縦帯を 4.7cm 間隔で削りだし、その間に直径 2.8cm の珠紋を削りだす。鰭は平坦面が基底部側に形成される逆段で、幅 2.1～3.3cm を測る。側面には粘土紐積み上げの痕跡が認められ、右側面内面には強いナデの痕跡が認められる。縦帯の中に珠紋という構成を持つ鴟尾は、珠紋帯鴟尾とよばれ、その多くが 7 世紀後半に作られている（大脇 1999）。その中でも古い段階に位置付けられるものとして大阪府羽曳野市善正寺（埴生廃寺）出土例がある。善正寺出土例は、縦帯（幅 1.6cm）2 条を 5cm 間隔で配して連珠紋をはさみ、各珠紋を径 3



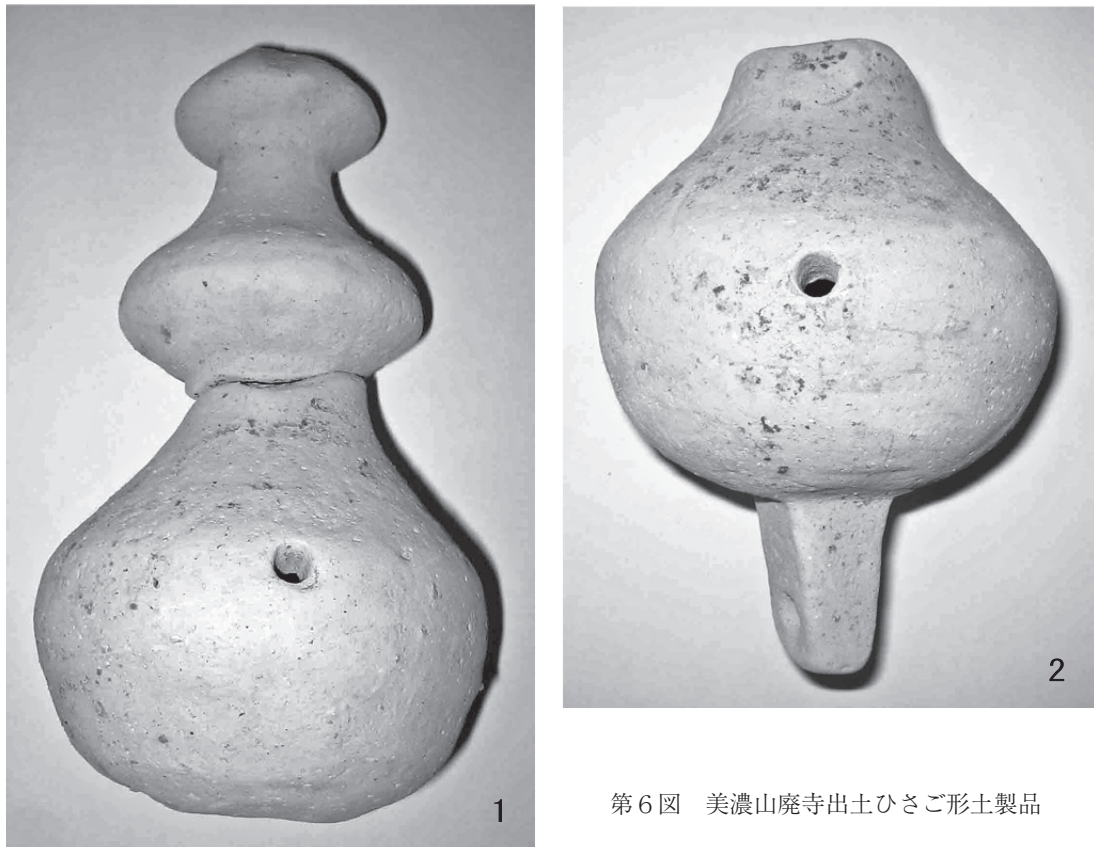
第 5 図 出土鴟尾推定部位
(猪熊ほか 1980、36 頁部分名称へ筆者加筆)

cmで削りだしており、美濃山廃寺例の構成や技法に最も近いといえるが、正段である。

炉跡1から出土した鴟尾にあるような逆段は、奈良県橿原市古宮遺跡・奈良県高市郡飛鳥寺A型・京都市右京区広隆寺・和歌山県伊都郡佐野廃寺に例があり、6世紀末から7世紀代に多い傾向にあるが、京都市中京区平安宮豊楽院・京都市北区上庄田瓦窯C型・京都市北区西賀茂瓦窯跡群などに9世紀代の例も認められ、逆段という要素で美濃山廃寺出土鴟尾の時期を決定することは難しい。このため、現段階では珠紋帯鴟尾であることやその施文方法などから7世紀後半に属する可能性があるとしたい。

鬼瓦は、鬼面の目に相当する破片が1点出土した。基底部最大径2.9cm、残存高3.0cmを測る。溶解炉の周辺からも鬼瓦の破片が出土している。このため、築炉以前のくぼ地に鬼瓦が流れ込んでいたものと考えられる。

ひさご形土製品は、2個体分が出土した。第6図1は、中空のひょうたん形頭部が残存し、残存長17.4cm、最大幅9.4cmを測る。第6図2はひょうたん形の下部と中実方形の脚部が残存し、残存長12.6cm、脚部3.8cm、最大幅9.2cmを測る。第6図1と2から、復元長は21.2cm程度であったと考えられる。そもそもひさご形とは『東大寺要録』巻第8にある「東大寺権別当実忠二十九か条事」、天平宝字八年の記述に由来する（筒井編1944）。実忠は奈良時代の僧侶であり、東大寺要録の中に自らの業績を書き記している。問題の記述は天平宝字8（764）年、僧正良弁の命で東大寺東塔の路盤を上げるという部分にある。命をうけた工人たちは路盤が重く、塔が高すぎるとして躊躇した。このため、実忠が路盤を上げることになったのである。実忠は速やかに



第6図 美濃山廃寺出土ひさご形土製品

この作業を行うとともに相輪先端部分である「匏形」(ひさごがた)に最勝王経と仏舍利をおさめたというのである(森 1994)。

相輪は宝珠・竜車・水煙・宝輪・請花・伏鉢・路盤の7つの部分からなる。実忠が「匏形」(ひさごがた)と呼んだのはこのうち宝珠と水煙であり、舍利をおさめたことから塔の最も重要な部分であったということが出来る。このように炉跡1から出土した遺物だけをとりあげても美濃山廃寺が仏教信仰と深くかかわり、特殊な性格と歴史的変遷を経た遺跡であると推察できる。

4. まとめ

本稿では、第6次調査の概要と同調査で検出された銅溶解炉である炉跡1および、その出土遺物について報告した。遺構からは寺院として評価できる積極的な要素が見当たらないにも関わらず、遺物は篤い仏教信仰を窺わせる多様な遺物と、仏教施設の維持管理のために併設された工房跡の存在をうかがわせる。今後は、隣接する第7～9次調査の成果も加味しながら遺構・遺物の詳細な検討を行い、謎に満ちた「美濃山廃寺」の復元を行っていきたい。

(関廣尚世)

本稿作成にあたり下記の方々にお世話になりました。記して感謝します。

大脇潔(近畿大学)、鈴木瑞穂(九州テクノリサーチ社)、中東洋行(関西大学大学院)、森郁夫(帝塚山大学)。

(いの・ちかとみ=当調査研究センター調査第2課調査第3係次席総括調査員)

(せきひろ・なおよ=当調査研究センター調査第2課調査第3係調査員)

参考文献

- 猪熊兼勝・大脇潔・松本修自・津村広志 『日本古代の鴟尾』 飛鳥資料館図録7 奈良国立文化財研究所 1980
- 宇治田和生 『特別史跡百済寺跡-再整備事業に伴う平成17年度発掘調査概要-』 枚方市文化財調査報告第51集 枚方市教育委員会 2006
- 宇治田和生・大竹弘之 『特別史跡百済寺跡-再整備事業に伴う平成18年度発掘調査概要-』 枚方市文化財調査報告第55集 枚方市教育委員会 2007
- 大脇潔 『鴟尾』 日本の美術 No.392 至文堂 1999
- 田畑基 『法興寺跡』 和田山町文化財調査報告書 第8集 和田山町教育委員会編 1998
- 筒井英俊編 『東大寺要録』 全国書房 1944
- 三宅俊隆・西田敏秀・大竹弘之 『特別史跡百済寺跡-再整備事業に伴う平成19年度発掘調査概要-』 枚方市文化財調査報告第57集 枚方市教育委員会 2008
- 三宅俊隆・松野元宏・大竹弘之 『特別史跡百済寺跡-再整備事業に伴う平成20年度発掘調査概要-』 枚方市文化財調査報告第59集 枚方市教育委員会 2009
- 森郁夫 『東大寺の瓦工』 臨川書店 1994
- 菱田哲郎 「鴟尾の生産と地域色-東播系と西播系の鴟尾-」 『古代文化』 第40巻第6号 1988

国宝清水寺本堂の調査

引原茂治

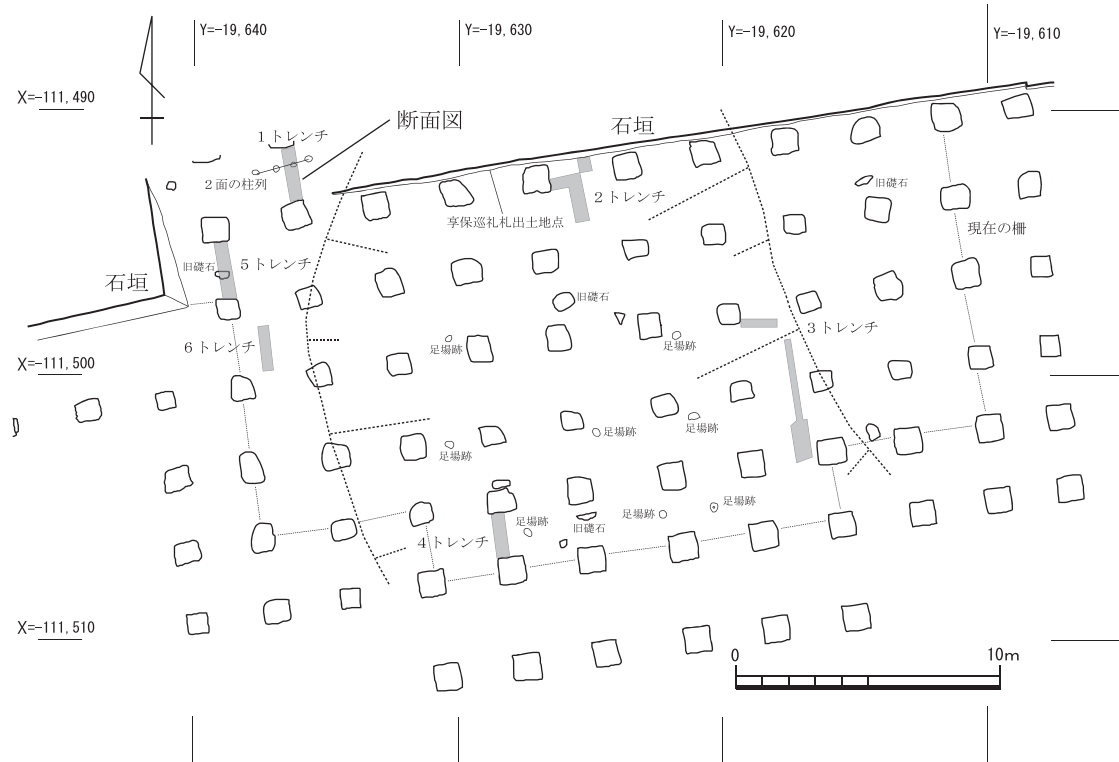
1. はじめに

清水寺は、宝亀9(778)年に延鎮が草堂を営んだことに始まるとされる。延暦17(798)年には坂上田村麻呂が延鎮を開基として寺を建立し、清水寺と名付けたといわれる。以後、度々災害に見舞われ、そのたびに再建を繰り返し、今に到る。現在の本堂は、寛永6(1629)年の火災の後、徳川家光によって寛永10(1633)年に再建されたものである。

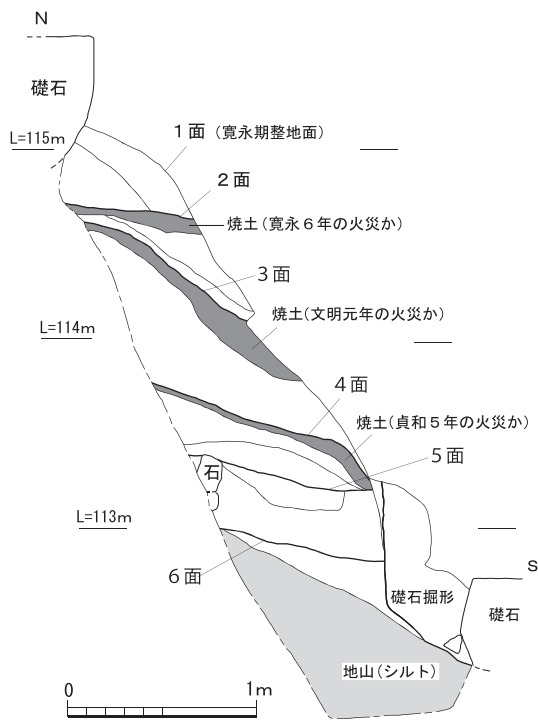
今回の調査は、国宝清水寺本堂ほか8棟保存修理工事の本堂基礎工事に先立ち、江戸時代初期の寛永期に建立された現本堂の礎石の据え付け方や地業のあり方、地下遺構の残存状況を確認するために実施した。調査地は、京都市東山区清水1丁目294番地に所在する。平成23年10月18日に調査を開始し、12月9日に終了した。

2. 調査内容

調査地は、埃状の表土に覆われていた。そのため、まずこの表土を除去して本堂および舞台下の地面の状況を確認した。その結果、旧礎石と考えられる石材などを検出した。その後、地下の



第1図 調査地平面図



第2図 1トレンチ断面図



写真1 調査地近景 (南から)



写真2 1トレンチ断面 (南西から)

状況を知るために必要と考えられる部分に6か所のトレンチを設定して断割を行った。

1トレンチでは3面の焼土層と、3面の整地層を確認した。清水寺本堂は、記録に残っている限りでは、6回焼失している。寛治5(1091)年、久安2(1146)年、承久2(1220)年、貞和5(1349)年、文明元(1469)年、寛永6(1629)年である。このうち、久安2年は当時清水寺の本寺であった興福寺との争いに、文明元年は応仁・文明の乱によるものである。

現在の表土面(1面)はタタキ状に堅く締った整地土である。調査地中央部の様子をみると、タタキ状に堅く締った表土の下層に、火を受けた痕跡がある瓦片などを含む土を盛っていることが窺える。その瓦は16世紀頃のものともみられ、明らかに近世のものともみられる遺物は含んでいない。その下層に焼土面(2面)があるが、この焼土面は16世紀以降の火災によるものと考えられる。したがって2面は寛永6年の火災によるものであり、現表土は寛永期の造成によって盛土されたものとみるのが妥当である。その下層の焼土面(3面)に相当するとみられる焼土面を2トレンチでも検出している。2トレンチでは、この焼土下から13世紀から14世紀にかけての頃

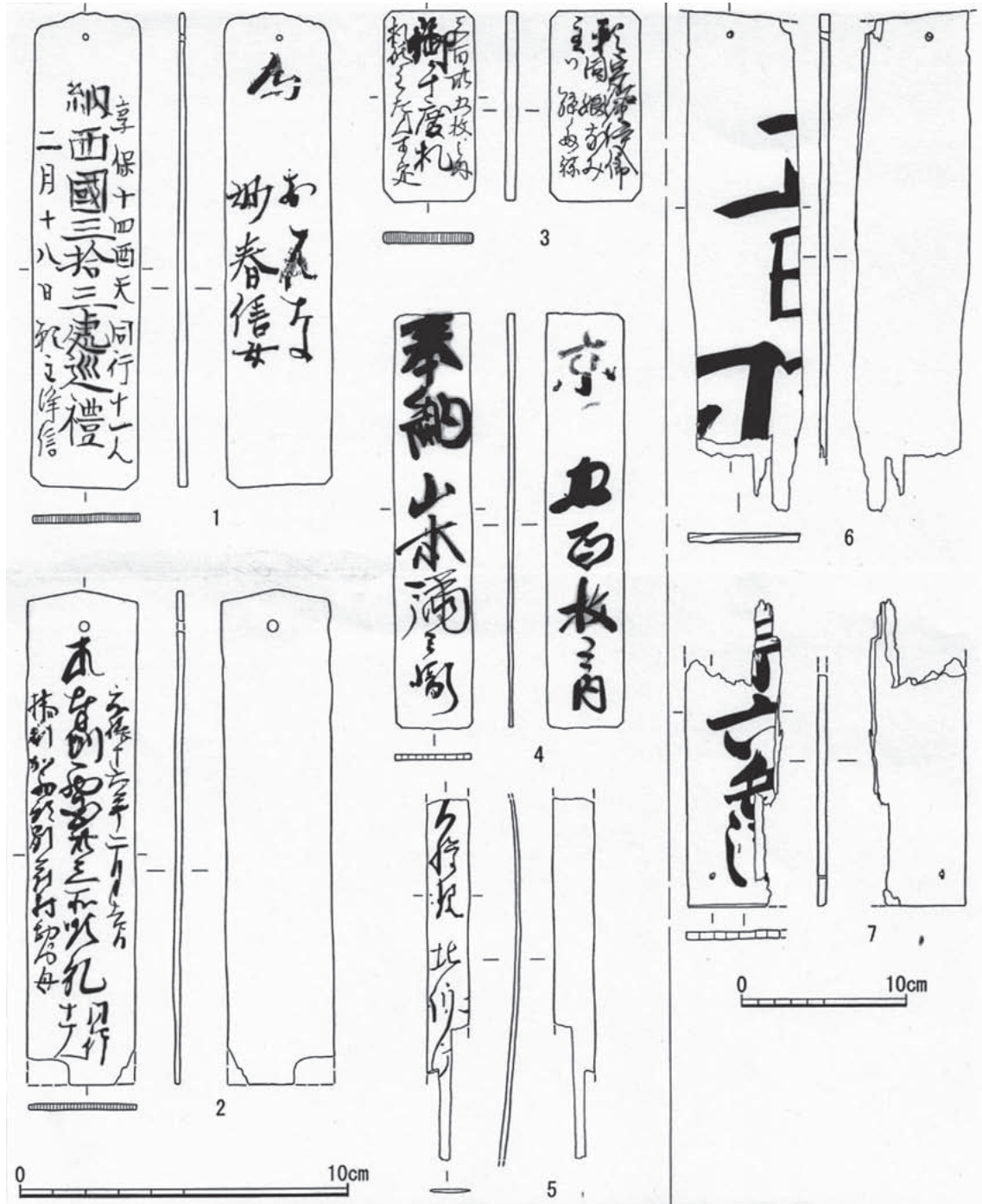
の中国製青磁片が出土している。このことから、3面は、貞和5年の火災後に盛られ、文明元年に被災した可能性がある。その下層の焼土面(4面)は貞和5年の火災によるものと考えられる。さらに下層では2面の整地層を確認している。

今回の調査地の北側奥部の本堂下陣下や西側には石垣が築かれている。石材は花崗岩の割石で、石を割る時の矢痕が残るものがある。方形の刻印がある石材も使用されている。また、赤色顔料で円状の文様が記された石材も見受けられる。この文様が、近世城郭の石垣の刻印と同様の性格をもつもので、風雨の当たらない場所ゆえに残存したとすれば、興味深い事例と言えよう。この石垣は、打ち込みハギであり、石材に

火を受けた痕跡がなく、寛永期に築かれたものと考えられる。なお、寛永期に設置されたとみられる礎石も、花崗岩の割石で、矢痕が残っている。

3. 出土遺物

掘削範囲が限られており、遺物の出土量も多いとは言えないが、各時期の遺物がある。古いものでは、二彩多口瓶の一部とみられる破片が出土している。8世紀に遡る遺物とみられる。平安時代の灰釉陶器片なども出土している。4トレンチからは10世紀頃の製品と考えられる「て」の



第3図 墨書納札・板材実測図

字状口縁の土師器皿が出土した。また、時期不明ながら、墨書土器片も出土している。

調査地全体にわたって大型の中国製青磁牡丹唐草文瓶とみられる破片が多数散布していた。瓶だけでなく、中国製青磁香炉片も含まれている。13世紀から14世紀にかけての頃の製品とみられる。

また、中世のものと考えられる瓦も多数出土している。特に寛永期の盛土とみられる層からは、16世紀頃と考えられる軒平瓦が出土している。本堂は桧皮葺であり、確実に本堂に伴う遺物とは言い難い。本堂西側に隣接して、本瓦葺の朝倉堂がある。朝倉堂は、越前朝倉氏が寄進した建物で、永正年間(1504～20)には完成していたといわれる。これらの瓦は、本堂と共に被災した朝倉堂に使用されていた可能性が考えられる。

近世の遺物としては、巡礼札などの木札がある。1は北側奥の石垣の隙間に二つ折りされて差し込まれた状態で出土した西国三十三所の巡礼札である。札には「享保14(1729)年」の年号と「願主浄信」の名前が記される。裏面には浄信が身内の女性の供養のために納めた旨が記されている。場所的に、偶然に札が落ち込むことは考えられず、意図的に持ち込まれた可能性が高い。頂部山形の木札で、下端は隅切される。上部中央が穿孔される。長さ14.5cm、幅3.3cm、厚さ0.15～0.3cmを測る。2は表土中から出土した西国三十三所の巡礼札である。「元禄16(1703)年」の年号や、「播州加西郡別府村」の住所が記される。裏面は無地である。頂部山形の木札で、上部中央が穿孔され、その下に梵字が記される。長さ15.2cm、幅3.3cm、厚さ0.2cmを測る。3は中央に「御千度札」と書かれており、その右に「三百卅五枚之内」、左に「札願主たんす定」と記される。裏面には願主やその娘「なみ」、孫「たね」の名が記される。年号等はない。四方隅切の小型の木札で、長さ5.8cm、幅2.75cm、厚さ0.35cmを測る。4は奉納札で、表面に「奉納 山本満兵衛」、裏面には「京(朱書) 五百枚之内」と記される。年号等はない。長方形の木札で、長さ12.7cm、幅2.35cm、厚さ0.1～0.2cmを測る。5は竹製で、片面のみに墨書される。上下を欠損しており長さ不明である。幅1.3cm、厚さ0.15cmを測る。6は板材の一部とみられる。墨書は不明であるが、「音羽」の可能性が考えられる。7も板材の一部とみられる。「□六兵衛」とみられる墨書がある。

4. まとめ

今回の調査では、寛永期の地業のあり方を明らかにすることができた。本堂の柱は礎石に据えられている。東側と西側の礎石は安定した地山上に据えられていることを確認した。調査地の中央部は谷状の地形を呈する。寛永期の再建では、瓦片などを含む土をこの谷部に盛り、その上にタタキ状の堅く締った整地土をほぼ全面に敷いて表面を整形している。その後、礎石据え付けのための掘形を設け、礎石を据えて周囲を整地土と同質の土を用い埋め戻す。また、寛永期の作業用足場跡とみられる柱穴も検出した。なお、旧礎石と考えられる石材なども残存しており、寛永期以前とみられる柱列跡も検出している。本堂の地下には、さらに古い段階の遺構が、良好に残っている可能性が考えられる。焼土面も3面確認した。本堂が少なくとも3回、火災に遭ったことを示す。(ひきはら・しげはる=当調査研究センター調査第2課調査第1係主任調査員)

あかりをつけましょ(上)

－灯火器の実証実験－

牧田梨津子

1. はじめに

平成20(2008)年、京都府木津川市馬場南遺跡で、5000点以上の灯明皿が出土した。同遺跡からは万葉歌木簡、三彩陶器などが出土し、墨書土器から「神雄寺」という寺院であることが明らかにされている。

灯火器とは、灯火照明に使用した灯明皿や燭台などの照明器具のことをさす。古代における照明は火であり、神聖なものとされ宗教的な意味でも多く灯されてきた。その代表例が灯明である。灯明は神仏にささげる「ともしび」のことである。特に仏教においては、迷盲を打ち破る智慧にたとえられる。また「法灯」などともいう。供養として、飲食のほかに香や華、写経などとともに、灯明は行われてきた。

また、「ともしび」は『令義解』の主殿寮の部で燈は油火、燭は蠟火とその区別をしている(中野1981)。中でも、口縁端部に付着する油煙、及び灯芯の焼け残りによってその存在を知られる灯明皿については中世以降多くみられ、灯火器の主流を占める。

しかしながら、照明に関する研究はほとんどなされていない。そのため、油を使った照明について知るために、いくつかの実験を行った。実験をするにあたって、文献に灯火についての記述がみられたため、記述を挙げて実験について述べる。また、文献を実証した実験を行った。

2. 文献記載

『日本書紀』と『続日本紀』の記述には、灯火に関する記述がみられる。岩波書店刊の古典文学大系を参考に記述する。

『日本書紀』に燃灯の記録が見られるのは、白雉2(651)年12月晦の条からである。「(難波)味経宮に二千一百余の僧尼を請せて、一切経を讀ましむ。是の夕に、二千七百余の燈を朝の庭内に燃して、安宅・土側等の経を讀ましむ。是に、天皇、大郡より、遷りて新宮に居る。号けて難波長柄豊崎宮と曰ふ」とあり、難波宮の地鎮の仏事の際に灯されたとみられる。白雉3(652)年12月晦の条に、「天下の僧尼を内裏に請せて、設齋して大捨てて燈燃す」とある。そして、朱鳥元(686)年6月19日の条に、



写真 馬場南遺跡灯明皿出土状況

「勅して、百官の人等を川原寺に遣わして、燃灯供養す。仍、大きに齋会して悔過す」とある。

続いて『続日本紀』では、天平16(744)年12月8日の条に、「一百を度す。この夜、金鐘寺と朱雀路とに灯火一万坏を燈す」とある。天平18(746)年10月6日の条に、「(聖武)天皇と(元正)太上天皇と(光明)皇后と、金鐘寺に御幸したまひて、盧遮那仏を燃灯供養したまふ。仏の前後の灯火一万五千七百餘坏。夜、一更(午後7時から9時)に至りて数千の僧をして、脂燭を撃げ、讚歎供養して、仏を繞ること三匝せしむ」とある。この行事は、盧遮那仏の雛型の塑像が完成したために行われたものだろうか。そして、ここではじめて「脂燭」(紙燭)、細く削った木や細かく巻いた紙の先端に油をしみこませた照明具、つまり蠟燭が登場する。これまでの灯火は油によるものだったろう。天平勝宝6(754)年正月5日の条に、「東大寺に行幸して燈二万を燈す」とあり、ここで行幸したのは孝謙天皇であり、大赦も行ったとある。

前述した灯りの数は、信頼できる数として記述していることが文献からもいえるのではない。『正倉院文書』のいわゆる蠟燭文書は、天平勝宝4(752)年に行われた開眼法要に参加した1万名の僧侶の名簿であるとみられているからである。馬場南遺跡では5000点以上の灯明皿が出土した。これは、奈良時代において「万灯会」という言葉は使用しないながらも、万^(注1)というに匹敵する数の灯火を行ったという事実を示しているといえる。

3. 先行実験

筆者が行った実験について述べる前に、奈良文化財研究所(以下奈文研)が先行して行った実証実験について略述しておく。『平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告』によると、灯火器が大量に出土した二条大路南側溝状遺構S D5100の整理作業中に、その痕跡が消失し易いために行なわれた実験である。

容器は、800℃程度の電気窯で焼成した素焼きの皿を使用した。灯芯には木綿の細ひもを使用し、燃料には純正胡麻油を使用した。油は2～3mm程度の深さに入れ、なくなれば補給して6時間灯火し続けた。6時間灯し続けて75mlを要したという。仮に同じ条件で灯し続けたとして、油の使用量について書かれた二条大路北側溝S D5300出土の木簡

「油二升一合 大殿常燈料日別三合 七日料 油八合 膳所料三日料 油七合 文基息所燈料日一合 油六合 内坐所物備給燈料 油一升四合 天子大坐所燈料 油四合 召女豎息所燈料合六升／此物能量者患道 者吾成明公莫憑必退山(西)陽道 七月内」

にある、天皇の常灯量2合^(注2)(166ml)は、灯明皿2個分に相当するという。

実験の結果、使用前の素焼きの皿は明るい灰黄色を呈していたが、灯火を灯すと色合いが大きく変化した。内面の油が浸み込んだ部分は、全体に暗灰色に変色し、部分的に赤橙色の発色が現れる。そして外面の油の浸み込んだ部分は、内面より明るい色合いの黄土色に変色し、明るい赤橙色のドーナツ状のリングの斑文が現れた。リング外周縁部は、淡い鮮やかなピンクを呈する。

実験結果をふまえ、S D5100の灯火器をみると、実験で現れたような色合いの変色が多く確認できた。しかしながら、長期間使用したものには同様の変化が認められないので、使用を重ねる

とまた変化が生じるようである。そして灯明皿は、黒色の痕跡のみを残すものではないということがわかる。

4. 使用器材

実態に迫ることのできる実験にするために、必要な器材について述べておく。それは奈良時代には、いまでいう「万灯会」のような大規模な灯火(燃灯供養)がすでに行なわれていたからである。また記述も前述した以外にも残されている。奈良時代の灯火について先行実験から引き継ぐ。

器について 灯火器については、『正倉院文書』の天平6(734)年「造仏所作物帳」に「盗油坏三千一百口 別口径4寸」とあり、『阿弥陀院宝物目録』^(注3)には「白銅燈坏一口 口径三寸七分」とある。これらのことから口径が約4寸、つまり11cm程度であることがわかる。このことから、実験で使用する器のサイズは12cm程度とした。また、須恵器、土師器の双方痕跡を伴ったものが出土していることから、まずは素焼きであるという点に絞って行う。

使用する燃料の油について 油は荷札木簡などから胡麻油、^(注4)荏油、^(注5)麻子油、^(注6)曼椒油があったことがわかっている。『倭名類聚抄』に

「油罏押附 四聲切苑云油以周反和名阿不良迓麻取脂也迓側陌反字與窄通迫也狭也内典云胡麻熟已収子熬之罏押俗語云之路無然則乃得出油湿繫經文也」

とある。つまり、油とは胡麻の実が熟したものを熬って、圧搾する油のことである(関根1969)。この記述を優先し、先行実験を引き継ぐためにも今回は純正胡麻油のみを使用することとした。また、灯火に多く使用されていた菜種油は、近世以降に多く流通するという点から使用しない。

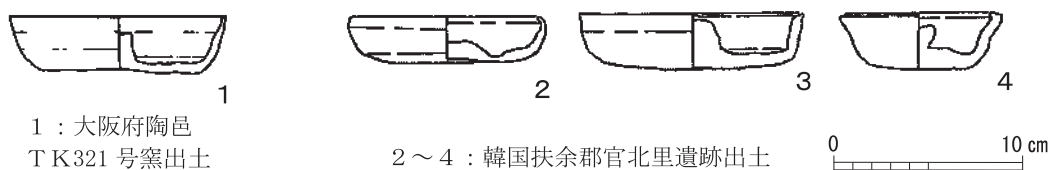
灯芯について 灯芯については、『延喜式』巻36「主殿寮」に「燈炷布二寸」や、「燈炷調布一丈九尺三寸」とある。巻7「踐祚大嘗祭」では、「燈心布八尺夜別二尺」ともある。また、『倭名類聚抄』に

「燈心 考聲切韻云炷音主又去声和名度宇之美燈心音訛也燈心也」

とある。布には、植物性の麻などの繊維の布と、動物性の綿(キヌワタ)の布があった。ここでいう「布」が動物性の絹であったか、麻のような植物性であったかも実験で明らかにする。

着火させる火について 安全と実験の目的から、今回は市販の着火装置(ライター)を利用した。

なお、奈文研が実験を行った理由に痕跡が消失してしまうことがあげられている。黒色の痕跡だけではないことも上げられている。そのことから、痕跡の消失には灯芯を器に接触させないで灯火することができる、灯芯置を使用したと考える。また、大阪府陶邑TK321窯出土の内部に



1 : 大阪府陶邑
TK321号窯出土

2~4 : 韓国扶余郡官北里遺跡出土

図 大阪府陶邑、韓国扶余郡官北里遺跡出土灯火器

灯芯置きを形成する形態の灯火器が、韓国忠清南道扶余郡の官北里遺跡や同郡定林寺で出土している。これらの灯芯置には油煙など黒色の痕跡を伴うものがあることから、灯芯置を使用する。灯芯置は、焼失しなければよいため、拾った小石(2～3cm程度)を使用する。

これらの器材を使用して実験を行っていく。(以下、次号)

(まきた・りつこ＝当調査研究センター調査第2課調査第1係調査員)

- 注1 『日本後紀』天長6(829)年8月20日の条「二品酒人内親王薨ず。光仁天皇の皇女なり。(中略)常に東大寺に於て万燈の会を行い、以て身後の資と為す。緇徒之を普しとす。」(僧侶らは、酒人内親王の行った万灯会を広く、滅罪の効用があるとした)が初出。(『訳注日本史料』集英社による)
- 注2 当時の1升は約829ml(篠原1991)。つまり2合は166ml。
- 注3 神護景雲元年、間崇によって書かれた。また、宝亀9年以降に成立した東大寺阿弥陀院における阿弥陀院悔過用資材目録『阿弥陀悔過料資材帳』の原本である。
- 注4 荏胡麻油のことで、えのあぶらといった。長屋王邸の溝SD4750出土木簡に「荏油」「上総国武昌郡高舎里荏油 四升八合 和銅六年十月」がある。他多数。
- 注5 麻の実の油。藤原宮跡北面中門地区の溝SD145出土木簡に「□麻子油三升□(四?)合三勺/今□益」がある。
- 注6 イヌザンショウの実の油。長屋王邸の溝SD4750出土木簡に「丹波国味田郡曼椒油三斗」がある。味田郡とあるがこれは現在も京都府内に存在する地名「天田郡」で、丹波国天田郡産曼椒油の荷札木簡である。また、天田の地名の初出。

〈出典〉

黑板勝美『増補新訂 国史大系 第二十六卷 延暦交替式 貞観交替式 延喜交替式 弘仁式 延喜式』吉川弘文館 1927

松田和晃「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」「阿弥陀悔過料資材帳」『索引対照 古代資材帳集成 奈良期』すずさわ書店 2001

黑板伸夫・森田悌『訳注日本史料 日本後紀』集英社 2003

〈参考文献〉

伊野近富ほか「(1)馬場南遺跡第2次」『京都府遺跡調査報告集 138冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 2010

篠原俊治「日本古代の枅」『京都文化博物館報告第7集 平安京左京五條二坊九町・十六』1991

関根真隆『奈良朝食生活の研究』吉川弘文館 1969

巽淳一郎ほか『奈良国立文化財研究所学報 第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告 長屋王邸・藤原麻呂邸の調査』1995

中野政樹『日本の美術 No.177 特集・灯火器』至文堂 1981

深津正『燈用植物』(財)法政大学出版局 1983

5. のじょう 野条遺跡第19次

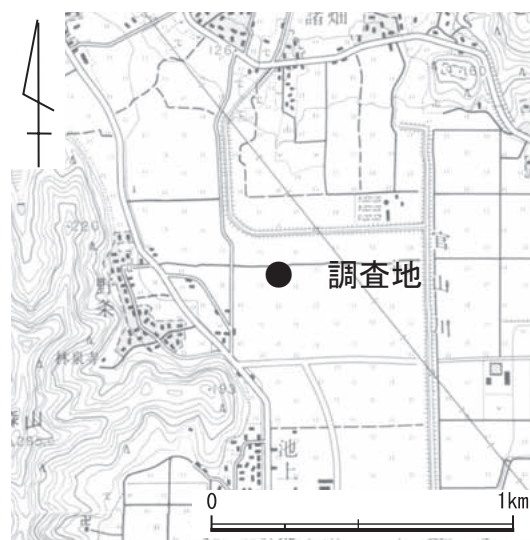
所在地 南丹市八木町野条

調査期間 平成23年8月17日～12月22日

調査面積 1,130㎡

はじめに 野条遺跡は、亀岡盆地北方に所在する弥生時代から中世の集落遺跡である。平成13年度から府営経営体育成基盤整備事業「川東地区」に伴う発掘調査が関係各機関により行われている。昨年度までの調査では、弥生時代後期を中心とする時期の集落に伴う竪穴式住居跡、区画溝、奈良時代の水路跡、平安時代の掘立柱建物跡、水路跡などが検出された。事業最終年度となる今年度は、ほ場整備対象地内の東西方向排水路部分を対象に発掘調査を実施した。

調査概要 調査対象地に6か所の調査区を設定し、調査を行った。第1トレンチでは小ピット群・土坑・溝状遺構を検出した。しかし、遺構面上層の近世以降の堆積層から古墳時代初頭の小型丸底壺の口縁部と思われる土器片が1点出土したのみで、遺構の時期は不明である。第2トレンチでは遺構面を3面検出し、各面で溝状遺構などを検出した。第1遺構面で検出した主な遺構は東西方向の溝である。埋土から多数の土器片のほか中世初頭の瓦器碗が出土した。トレンチ北側の現行水路の前身である可能性が高い。また、遺構検出面からは弥生土器片、奈良時代の須恵器片、中世初頭の白磁壺等が出土した。第2遺構面で検出された主な遺構は東西方向の溝2条と北西-南東方向の軸をやや異にする溝4条である。出土した須恵器から遺構の時期は6世紀後半～7世紀初頭が中心であると考えられる。第3遺構面で検出された主な遺構は東西方向の溝1条である。東西溝の埋土からは弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺物が出土した。第3トレンチでは小ピット、隅丸方形の柱穴、土坑、溝状遺構などを検出した。出土遺物がなく、いずれの遺構も時期不明である。第4トレンチは西から4-1、4-2、4-3の3つの小地区に分けて調査を行った。その結果、古代～中世の土地利用の変遷を示す遺構・遺物を検出した。4-3トレンチで検出した中世の溝は、4-1・4-2トレンチにまたがる可能性がある東西方向の溝である。この溝からは13世



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 亀岡)



第2図 トレンチ配置図(1/5,000)

紀の龍泉窯系青磁碗と15世紀の瓦質土器鉢などが出土した。4-3トレンチでは現代の水路とほぼ重複する位置で水路を検出し、近世以降と考えられる遺物が出土した。現代水路の前身水路遺構と考えられる。また、ピット群も検出しており、そのうち柱穴列になる遺構を1条検出した。なお、4-1トレンチの包含層からは土師器片が数点出土した。第5トレンチでは溝1条を検出した。第4トレンチの近世後半の溝と似ているが、遺物は出土していない。位置関係と

埋土の様相から現行の水路の前身である可能性がある。他に、溝・ピット・土坑などを複数検出したが、いずれの遺構からも遺物は出土しなかった。第6トレンチでは溝とピットを複数検出した。そのうち南北方向の溝2条は、これまでの調査で検出された溝の延長上に位置する。東西方向の溝2条は現代の用水路と重複する位置にあたり、主軸方向も平行することから現在の水路の前身と推定される。遺物は出土していない。ピット群についても、トレンチ東端部で柱痕が認められるものを検出しているが出土遺物はない。遺構面上層より土師器皿が出土している。

まとめ 今回の調査では、主に弥生時代後期末～古墳時代初頭、古墳時代後期～終末期、中世、近世を中心とした遺構・遺物を検出した。第2トレンチで検出した弥生時代後期末～古墳時代初頭の溝は、土器片が遺構底部の粘質土に張り付くようにして出土しており、当センターによる第17次調査で検出した大溝の事例とよく似ている。この溝はトレンチ中央部で南へ切れており、その延長方向に第17次調査の大溝が伸びている。また、この溝からは高杯や加飾壺など祭祀用と考えられる遺物が出土している。第6トレンチでは、南に隣接する第14次調査第16トレンチで検出された溝の続きを検出した。この位置は第10・11・12次調査で検出された平安時代後期の大型溝の延長線上にあたる。埋土の堆積状況もよく似ていることから、同一遺構の可能性が想定される。

第2～6トレンチでは現代の水路と重複、或いは隣接する位置から瓦器椀・瓦質土器・青磁碗などが出土する溝を検出した。水田地割りとの位置関係から平安時代末～鎌倉時代初頭に開削されたとされる水路の支線である可能性がある。第1、3～6トレンチではピット群を検出した。柱痕が残るピットも認められるが、いずれの調査区も範囲が狭長であるため、4-3トレンチの柱穴列以外は面的な相関関係を確認することは困難であった。これまでの調査で、奈良～平安時代、12世紀代の掘立柱建物跡が確認されていることから、この時期の遺構である可能性が考えられる。
(大高義寛)

ながおかきょうあとさきょう
6. 長岡京跡左京第547次

所在地 京都市伏見区淀大下津町(京都府流域下水道事務所内)

調査期間 平成23年8月17日～10月27日

調査面積 500㎡

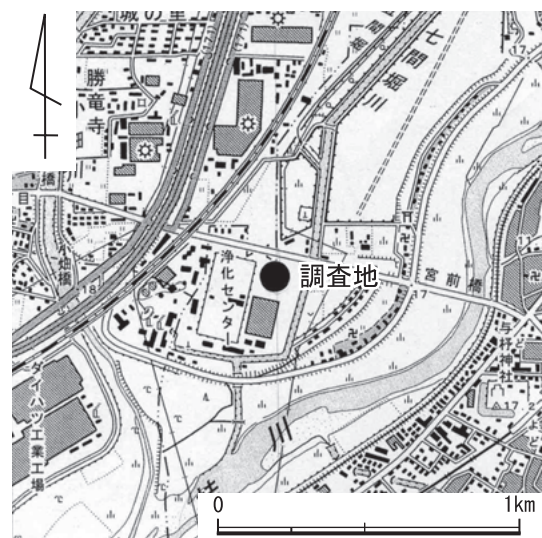
はじめに 今回の発掘調査は、平成23年度桂川右岸流域下水道幹線管渠工事(雨水南幹線)に伴い、実施したものである。今回の調査地は、長岡京跡左京域南端の九条域にあたり、長岡京跡の条坊復元案では朱雀大路の東にあたる東一坊大路の推定ライン近く及び左京九条一坊十三町域にあたる。

調査概要 調査地点には、2 m以上の盛土がなされ整地されていたため、調査に先立ち、掘削機械と土砂搬出用の大型重機を投入し、旧表土まで土砂を除去した。最終的には、現地表下約6 m、標高8 m地点まで掘削を行い精査を行ったが、顕著な遺構・遺物を検出することはできなかった。この後、さらに2 m掘り下げ、標高6 mの地点まで遺構の有無を確認したが、灰色粘土が堆積するのみで、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。

今回の調査地点の基本層序は、以下のとおりである。第1層は暗灰色土、第2層は暗褐色土である。これらは、旧水田耕作土層である。第3層は、黒灰色粘質土である。有機物を多く含む粘土質土層である。これ以下は、色調が灰色系の粘性の高い水性堆積物とみられる。第4層には、植物の根株の痕跡と見られる楕円形の痕跡が認められた。この痕跡は砂で覆われている。この砂は洪水により運ばれてきたものと推測される。第5層・第7層・第9層は、黒灰色～暗黄灰色系の粘土あるいは粘質土である。砂の混入の粗密はあるが、類似する堆積環境であったことが想定される。第6層と第7層は、黒色系の土層である。この土層が堆積した時期には、陸化が進み、植物が繁茂して土壌化した様子がうかがえる。

まとめ 以上のように、今回の調査は、中世の生活遺構あるいは長岡京期の遺構・遺物の検出を目指して実施したものであったが、上記のように、明確な遺構の痕跡あるいは遺物を検出することはできなかった。土層堆積の観察の結果からは、調査地点周辺は、淀川に近接して形成された湿地あるいは荒蕪地として存在した可能性が高く、水田などとして利用された状況があきらかとなった。

(田代 弘)



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 淀)

やまぎきのつあと
7.山崎津跡第18次

所在地 乙訓郡大山崎町大山崎

調査期間 前半期調査：平成23年4月26日～6月15日

後半期調査：平成23年10月24日～12月22日

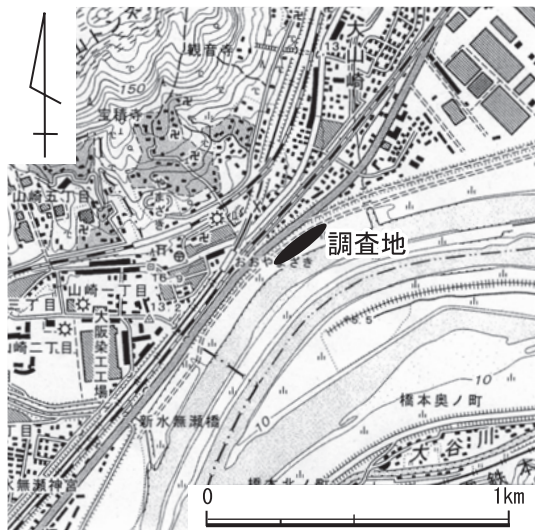
調査面積 1,000㎡

はじめに 今回の発掘調査は、緊急河川敷道路整備事業に伴って国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の依頼を受けて実施した。調査地周辺は、山崎津跡ならびに山崎橋の隣接地にあたることから関連遺構の検出が期待された。なお、発掘調査は、昨年度の小規模調査の成果をもとに、遺物包含層の堆積する範囲において実施した。前半期は北半部分において近世の遺物を含む水路を確認するとともに、後半期では南半部分において奈良時代から室町時代の遺物を数多く含む包含層を確認した。

調査概要 前半期の調査では、約8mの幅を有する水路を検出した。両肩部には、杭を列状に打ち込んで護岸している。最上層から近世後期の陶磁器類が出土している。

一方、後半期の調査地は、昨年度の1トレンチ～10トレンチ間をつなぐように設定したA地区とA地区から南西へ約40mの場所に設定したB地区の2か所において実施した。

A地区は、地表下約2.5mで13世紀後半から14世紀前半にかけての遺物包含層を確認した。包含層の厚さは、約1.5mを測る。上層は、近代の樋管排水路の敷設に伴う攪乱を受けていた。調査地の北東側は、西側に張り出す丘陵から流れ出たと考えられる角礫を含む土砂が堆積しており、その下層では暗灰色粘質土と砂層が互層となり堆積していた。この包含層には、遺物が多量に含まれていた。一方、調査区の南西側は、河川の流水が澱んだ状況を示すシルト層が厚く堆積していた。出土した遺物は、土師器や須恵器、瓦器碗などの土器類や瓦片、漆器碗、下駄や箸などの木製品、獣骨などがある。



調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 淀)

なお、山崎橋推定地にあたるB地区は、後世の堆積土の下層でわずかに遺物が出土したが、山崎橋の存在を示すような遺構や遺物は確認できなかった。

まとめ 今回の発掘調査では、前半期調査において近世後期に埋没した水路を検出した。当該水路は、今後、出土遺物を検討のうえで開削時期と埋没時期を特定しなければならないが、大山崎町内には、かつて「えあれ沼」の存在が想定されて

おり、それとの関連も視野に入れて検出の意義を考えていかなければならない。

一方、後半期の遺物包含層からは、奈良時代の土器とともに 13 世紀後半から 14 世紀前半にかけての土器や木器が出土している。完形に近い瓦器椀なども出土していることから、西側に張り出す丘陵からの再堆積ではなく、調査地に直接的に投棄されたと考えられる。今後、出土遺物の整理作業が進むことによって遺物群の時期幅などを把握し、当該包含層の意義を考えていきたい。

(小池 寛)



写真1 調査地全景(北西から)



写真2 調査前状況(北西から)

8. 椋ノ木遺跡第10次

所在地 相楽郡精華町大字下狛字椋ノ木ほか

調査期間 平成23年7月25日～12月16日

調査面積 1,300㎡

はじめに 椋ノ木遺跡は縄文時代から中世までの複数の時期に営まれた集落を中心とする遺跡である。遺跡は1級河川である木津川の左岸に形成された自然堤防及び後背湿地に立地しており、これまで平成7年度から平成22年度にかけて9回の発掘調査が実施された。その結果、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前・中期の竪穴式住居跡、中期の古墳、平安時代末から鎌倉時代の建物跡などのほか、条里制地割に由来する坪境溝や耕作溝群などが検出されている。今回の調査は第10次調査にあたり、木津川上流浄化センター施設新設に先立って実施した。

調査概要

中世 素掘り溝を多数検出した。そのうちでも調査区南端で発見した幅3.5mの浅い東西方向の溝は、坪境溝と考えられる。調査区北側の第9次調査でも坪境溝が検出されており、両者の溝の距離は約110mである。溝の東側では瓦器椀や土師器皿が完全な形で出土した。

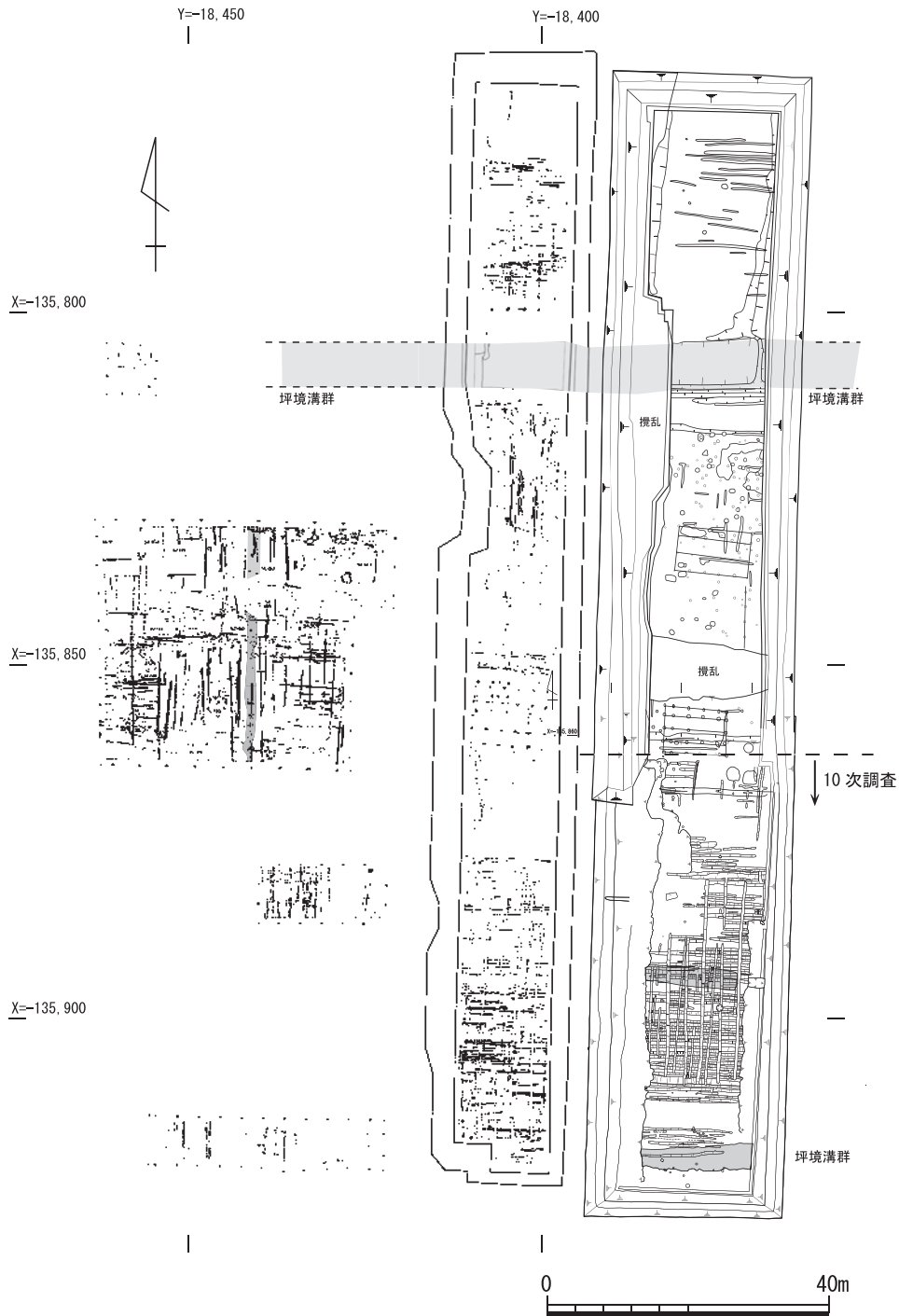
そのほかに耕作溝群が調査区中央部を中心に、南北および東西方向の溝を100本以上検出した。遺構の検出状況から南北方向の溝の方が新しいことがわかった。複雑に見える溝群もその傾きなどから2.7m(9尺)間隔で掘られた溝が位置を変えて掘られていたと考えられる。南北方向で3回、東西方向で4回以上溝が掘られたものと考えられ、溝内からは中国製の白磁・青磁・瓦器椀・土師器皿が出土しているが、いずれも細片で耕作時に混入したものと考えられる。



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 田辺)

こうした溝群の他には井戸跡2か所と、墓の可能性のある方形の土壇3か所を検出した。井戸はいずれも13世紀代の瓦器を含んでおり、内部施設は存在していなかった。墓状の土壇は木棺痕跡や遺物を検出することができなかった。

古墳時代 3基の古墳の存在を示す溝を検出した。1つは第9次調査で検出した古墳S X 1の南半部分の溝で、直径12mの円墳に復元できた。昨年度の調査結果から5世紀末の古墳であることが明らかになっている。古墳S X 167は不定形な方墳で、一辺が約11mの規模をもっている。古墳全体の西側半分だけの溝を検出したが、埋葬施設は残



第2図 中世遺構面平面図

っていなかった。南側の溝から10数点の完全な形の須恵器や土師器がまとまって出土した。古墳の時期は、遺物から5世紀末と考えられる。

そのほかに調査区北西隅部で古墳の周溝の可能性が指摘できる溝を発見している。溝内からは滑石製の紡錘車が出土した。これまでの調査で7基の古墳を検出したことになり、新たに椋ノ木古墳群と命名された。

(中川和哉)

きづがわかしょう 9. 木津川河床遺跡第22次

所在地 八幡市八幡茶屋ノ前地先
調査期間 前半期調査：平成23年4月25日～6月14日
後半期調査：平成24年1月10日～2月10日
調査面積 700㎡

はじめに 木津川河床遺跡は八幡市と京都市にまたがる弥生時代から近世に至る集落遺跡である。発掘調査地は桂川左岸の河川敷内に位置しており、国土交通省による桂川河道掘削事業によって遺跡の毀損の可能性があったので発掘調査を実施した。

調査概要 発掘調査は増水期を避けるため中断を経て完了した。発掘調査は調査対象地に対して1～5トレンチを春に、6～11トレンチを冬に合計11か所の小規模調査を実施した。各トレンチは北東(川上)から1～11と南西方向に向かい設定した。1・3・6トレンチは北東方向にほぼ同じ位置で、3・6・1と川から遠くなる。調査の結果2・8・9トレンチで遺構を検出した。

2トレンチでは斜面部に平らな割り石を貼り付けたような状態を検出した。平坦な場所では人頭大の礫の集石部などを検出した。出土遺物には江戸時代と考えられる陶磁器類がある。

8トレンチでは手の平大程度の礫が斜面に張り付いた状況を検出できた。部分的に大型の石が円弧状を呈する部分が存在していた。

9トレンチでは2トレンチと同じように平らな割り石が並んで検出できた。部分的に溝状になった部分や直線状に区画された部分もあり、構造物の一部を形成していたものと考えられる。出土遺物には江戸時代の陶磁器などがある。



調査地位置図

(国土地理院 1/50,000 京都西南部)

1・4・5トレンチは2トレンチと堆積状況は似ているが、顕著な遺構は検出できなかった。3・6トレンチは攪乱層を取り除くとすぐに砂礫層に変わった。

7トレンチは貼り石に使われた石材が出土しており、近くに遺構がある可能性が指摘できる。

10・11トレンチは3 m以上の攪乱土が堆積していた。

まとめ 今回確認した礫敷き及び貼り石状遺構は、2～9・10トレンチの間の部分に広がっているものと考えられる。遺構の時期については、遺物から江戸時代頃ということ以外確定できない。

(中川和哉)

ながおかきょうあとうきょう
10.長岡京跡右京第1024次

所在地 長岡京市下海印寺川向井・奥海印寺荒堀

調査期間 平成23年12月5日～12月16日、平成24年1月11・12日、2月16日

調査面積 305㎡

はじめに この調査は、第二外環状道路建設に伴い実施したものである。川向井地区は、長岡京跡の条坊復元では右京七条四坊四・五町、七条大路(旧条坊では右京七条四坊二・七町、七条条間小路)にあたる。また、縄文時代～中世の集落遺跡である奥海印寺遺跡の範囲に含まれる。

現在の小泉川は、昭和56年以降に河川改修が行われ南東方向の直線的な流路に改変されているが、それ以前は、下海印寺地区より下流は大きく蛇行しながら流れていた。

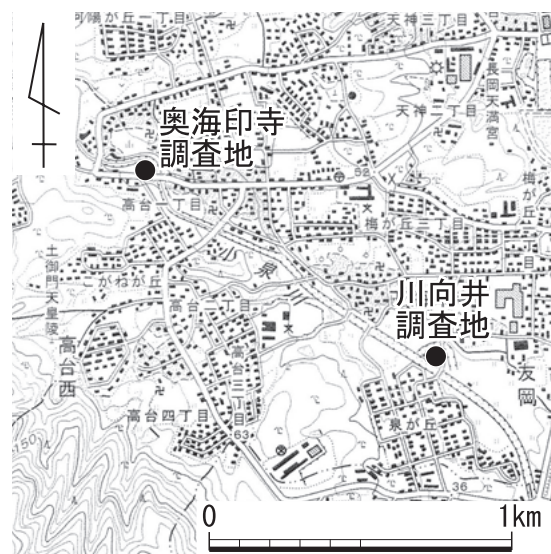
今回の調査地は、旧小泉川と現小泉川に挟まれた、島状に残る部分にあたり、西・北・東側には旧河道が大きく蛇行していた痕跡が残り、この旧流路部分にコンクリート造りの川向井橋が現存している。旧地形を復原すると、南側の泉が丘地区から丘陵が北に張り出した裾部に沿って旧河道が大きく「U」字状にカーブしていたものと考えられ、調査地は丘陵先端部分に相当すると考えられた。

奥海印寺地区は、京外となり縄文時代～中世の集落遺跡である伊賀寺遺跡の範囲に含まれる。

第二外環状道路建設に伴う府道伏見柳谷高槻線の拡幅工事に伴い調査を実施した。調査地は、小泉川右岸の河岸段丘上の水田である。現況の道路の北側、幅約4m・長さ42mが対象で、現況の水田面(標高47.9m)より下0.7mが地盤改良されるため工事の進行に合わせて東半・西半の2回に分けて調査を実施した。

調査概要 川向井地区では住宅・道路造成に伴う盛土が旧耕作土上に2.6mあり、旧耕作土下は床土である。その下層には厚さ5～10cm程度の水平に堆積した水田造成に伴う整地土が確認された。この層中より細片化した須恵器・土師器・瓦質土器が出土した。水田造成に伴う土砂搬出先の土器が混入したものと考えられる。中世以降に耕地化されたものと判断され、過去の調査成果を追認する結果となった。

奥海印寺地区では、工事による掘削深度が浅いため、現況の水田造成に伴う整地土を確認するにとどまった。



調査地位置図

(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

(増田孝彦)

遺跡・遺構の物差しにならなかった出土品

現在、古物商や骨董品をあつかっているお店などに行くと、とても古い時代のモノをみることができます。中には数千年前のモノにお目にかかることもあります。

骨董品が流通する以上、現代社会には、博物館や出土品を収蔵する施設とは別に、様々な時代のモノがいろんなところに存在していることになります。

さて、考古学で年代を決めるもっとも基本的な物差しは、出土遺物です。

地質学の地層累重の法則にしたがって、下の地層ほど古い時代の堆積とみる前提にたって、出土品の新旧関係を比べてデータを蓄積してきたのです。

そうした、調査成果を数多く検証して、「出土品による年代の物差し」ができあがりました。

そして、そのいくつかの定点を、理科学的な分析で補強して、この「物差し」により高い精度と信頼性を与えてきました。

発掘調査をして、縄文土器が出土したらそれは縄文時代の遺跡。古墳時代の埴輪が出れば古墳と言った具合に、出土遺物は遺構の年代を決める第1次資料としてとても重要なのです。

ところが、近年、こうした基本則に合わない調査事例に遭遇することがあって、我々を困らせています。

例外的事例として早くから指摘されてきた代表格は、中国製の銅鏡です。紀元1世紀頃に中国で製作された鏡が4世紀の日本の古墳から出土することが早くに指摘されていました。

確かに、当時、日本人にとって、非常に精緻にデザインされた銅鏡は、とても貴重でした。素材が腐食しにくい金属ということもありました。古代人はこれを子孫累代に伝世することにしました。少なくとも300年間大切に扱われてきました。出土品が必ずしも、その遺構の年代を示さない顕著な事例と言えます。

これは極端な話ですが、近年、発掘調査をしていると、これに類する経験をすることが少なからずあります。

今回は、当調査研究センターがこれまでの調査で経験した事例のうち、八幡市木津川河床遺跡、同市荒坂・女谷横穴群、長岡京市鈴谷遺跡、八幡市ヒル塚古墳の調査で体験した不可思議な調査事象、いわば理屈通りには年代決定が困難であった事例を報告いたします。

(伊賀高弘)

青磁輪花平皿について

—戦国時代の骨董趣味—

八幡市木津川河床遺跡第21次調査の出土遺物に一片の青磁片があります。淡緑青色というか、緑がかった空色の青磁で、12世紀頃の南宋時代の質の良い皿に見えます。そして輪花の刻みから内面下方へ白線を引いています。この特徴をもつ青磁皿は福井県の一乗谷朝倉氏遺跡(第29・44・51次)で多く出土しているほか、福岡県博多遺跡(第60次)にも例があります。どちらも16世紀の遺構からの出土ですが、この木津川河床遺跡の美しい破片を見ると、とても明代の青磁には思えません。

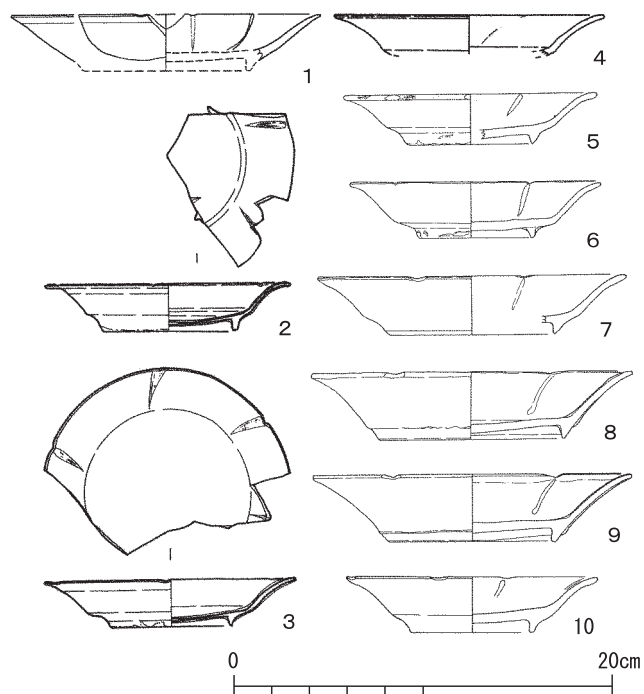
現地調査担当者に告げると、周辺の土層・遺構と遺物の出方から、遺物は14世紀以前のものに限られるはず、とのことでした。16世紀のものとするれば、木津川河床遺跡では混入品ということになります。古い南宋時代のおそらく龍泉窯系の青磁と考えた方が自然です。そんな古い遺物がなぜ一乗谷や博多の16世紀の遺構から出土するのでしょうか。本誌第114号の共同研究報告にも、島根県の尼子氏系の富田城から、この種の青磁が多数出土したとあります。

ここで想起されるのは、一乗谷遺跡のこの遺物が出土した屋敷跡、通称「医者の家」の「古美術品」です。医学書や匙・乳鉢が出土したことから、そう呼ばれている武家屋敷です。この屋敷からは300年も前の青白磁梅瓶・青磁片口・下蕪花生などの「骨董品」が出土しているのです。

しかも後二者には、銚による補修跡もあります。銚の補修は、重要文化財の砧青磁碗「馬蝗絆」で有名です。報告者はこれら数百年前の遺物を「威信財」としています。この屋敷から合計7点も出土しているこの輪花平皿もそのような威信財、つまり「お宝」ではなかったかと考えられるのです。

また、博多遺跡例も極めて薄い造りで、これも12・13世紀のものに見えます。博多では最も遺物の多い時期で、この時代の遺物が16世紀の遺構に混じり込んでもおかしくはありません。あるいは、2枚も出ているので、ここでも「お宝」だったのでしょうか。

(小山雅人)



1. 木津川河床遺跡 2・3. 博多遺跡群第60次
4. 一乗谷遺跡第44次 5～10. 同51次

図 各地で出土した青磁輪花平皿

あらさかおうけつ 荒坂横穴の埴輪と横穴

よく復元整備された古墳を訪ねると、墳丘を幾重にも巡る埴輪を目にする事が多いと思います。その多くは、土管のような形をした円筒埴輪と呼ばれています。

これは、お墓の前で執り行われたお祭りの際、底の丸い壺を載せる台が本来の姿で、3世紀の後半からおよそ400年続く古墳時代を通して古墳の外表面を飾る装飾として欠かさずもちいられてきました。

一つの古墳に沢山並べられる事から、その製作に当たっては、作業の効率化を意図した技術革新が顕著に認められ、古墳の年代を知る上での重要な物差しにも利用されています。

さて、平成13年度に八幡市で実施した横穴と呼ばれる墓の調査をしている際、一風変わった埴輪が出土しました。

調査をした横穴は、周囲に数十基が群集する一大墓地。しかし、埴輪が出土したのは、1基(荒坂B支群5号横穴)だけで、遺骸を納める墓室の入口部分に円筒埴輪を3つ連接させて、あたかも墓道を塞ぐように置かれていました。

そして、埴輪を詳しく見てみると、非常に奇妙なものである事が次々と判明しました。

その一つひとつは、年代の物差しに照らす事ができない特徴がありました。

例えば、外面にみられる丁寧な横方向のハケメ。これは、4～5世紀に流行する製作方法ですが、出土した横穴が営まれた時代は、豊富な副葬品から、6世紀後半に造墓され7世紀初頭に追葬行為を終えることが判明しました。

京都府南部地域では、6世紀後半以降、円筒埴輪は小型化しつつやがて消長していく時期に当たります。

常識を外した埴輪ですが、さらに細かく見てみると、タガ状突帯の側面に深い沈線が引かれること。須恵器によくみられるタタキ手法が認められ、焼成も窖窯による還元炎で堅く焼かれています。このような埴輪はこの地域では認められない特徴です。実は、類品は、近在の京田辺市堀

切谷7号墳にもみられ、その特徴は、近畿を離れ東海地方で製作された特徴をもつ埴輪(いわゆる「尾張型埴輪」)であることがわかりました。東国に基盤をもつ継体大王の畿内入植に従って、この地域に尾張地域の勢力が扶植されたことは、式内社の祭神の系譜論からも検討されています。



写真 荒坂B支群5号横穴出土遺物

(伊賀高弘)

おんなだにおうけつ
女谷横穴の鏡と横穴

八幡市から京田辺市にかけての丘陵地は、京都府内でも有数の横穴密集地域です。特に、八幡市南側の女谷・荒坂横穴群は、府内でも最大級の横穴群です。このうち、女谷D支群の調査では、4号横穴と8号横穴で、ある程度内部が埋まった段階で墓として再利用された状況を確認しました。須恵器や土師器が出土し、それらの土器から9世紀頃に再利用されたものとみられます。特に、4号横穴では、土器のほかに、^{ずいうんそうらんはっかきょう}瑞雲双鸞八花鏡という銅鏡が副葬されていました。

この鏡は、唐鏡を原型として日本で作られた踏み返し鏡とみられます。鏡背には、鈕をはさんで左右に翼を広げて向かい合う鳥、上には遠山文、下には雲の上に留まる鳥を配しています。また、周縁部には花文と雲文を交互に配しています。直径11.2cmの花形の鏡です。同様の鏡が、奈良県霊安寺跡から出土しています。4号横穴で出土した鏡と比較すると、大きさや文様の状態が非常に似ており、同じ鏡を原型として作られた可能性もあります。出土した鏡は、湯廻りが悪かったのか、周縁部の花文や雲文が半周分鋳出されていませんが、当時の貴重品と考えられます。この鏡とともに葬られたのは、いわゆる一般庶民ではないと考えられます。

鏡は、鏡背を上にした状態で出土しており、下になっていた鏡面には紙の痕跡が残っていました。紙に包んで副葬されたものとみられます。

4号横穴は6世紀末頃に造られました。再利用された時期よりほぼ200年前になります。古代には、役人が亡くなると、出身地に葬られることがあります。横穴を再利用して葬られた人は、この地域の出身者とも考えられます。また、横穴が先祖の墓であるという記憶が残っていて、そのために、先祖とともに横穴に葬られることを望んだのかもしれませんが。そのように考えると、この鏡は、時をへだてた追葬を示す遺物とも言えます。

(引原茂治)



写真1 4号横穴鏡出土状況(南東から)



写真2 瑞雲双鸞八花鏡

すずたに 鈴谷遺跡の埴輪と石室

長岡京市鈴谷遺跡の発掘調査は平成21年度から着手され、この時に古墳時代前期後半頃の埴輪が出土しました。また、そのすぐ近くでは方形の石組が検出されました。石組は、石材と石組のサイズから埴輪が樹立していた古墳の埋葬主体部と推定されました。石室の残りは良好で、調査の成果が期待されました。石室内の調査は平成22年度に持ち越しとなり、石室と周辺部分の調査を改めて実施することになりました。そのタイミングで私が新たに調査を担当することになったのです。非常にドキドキしながら、調査に着手しました。

ところが、調査を始めてすぐに、妙な事に気がつきました。古墳であれば、当然、土を盛って墳丘を造っているはずなのですが、その痕跡が一切無いのです。石室がきれいに残っているのに、墳丘が削られてなくなっているとは思えません。また、埴輪が立てられているはずなのに、調査範囲を周りに広げても、埴輪が全く出土しません。石室の形態も、なんだか妙です。四方を石壁がめぐるはずなのに、石壁は北、東、西の三方にあるだけです。南側は石が散らばっているだけで、石壁が見つかりません。古墳の石材が後世に抜き取られて、他の用途に転用される例がありますが、このように南だけ抜き取られるのは、不自然です。「なんだか、妙なことになってきたなあ」と思いながら石室の中を掘り続けました。すると、石室の底に達しようとしたところで、予想外のものが出土したのです。古墳時代前期には存在しないはずの、須恵器でした。須恵器は破損がほとんどない完全な状態で、石室の床面から出土したことから、被葬者に副葬されたものと見て間違いありません。その上、驚くべきことに、須恵器の年代は、形態の特徴からおおよそ7世紀後半と考えられるものでした。鈴谷遺跡の古墳は、当初想定していたよりも300年ほど新しい、古墳時代終わり頃の古墳だったのです。愕然としましたが、不思議に思っていたことが全て腑に落ちました。古墳時代終わり頃の古墳は、しっかりと土を盛った墳丘を造らないことが多いので、石室の周りをいくら探しても墳丘が見つからないのは当たり前だったのです。また、石



写真 横穴式石室(南東から)

室の南側に石材がなかったのは、古墳時代後期に一般的になる、横穴式石室だったからなのです。古墳時代の終わり頃になると、石室の大きさや用いられる石材も小さくなるのですが、その石室と石材のサイズが、古墳時代前期後半の小規模な竪穴式石室と、たまたまよく似ていたのです。近くで発見された埴輪は、丘陵上に存在した、より古い時代の古墳から落ちてきたものだったのでしょう。

当初の予想が大きく外れ、驚きましたが、鈴谷の古墳は、長岡京市周辺では、今まで知られていたよりもはるかに新しい古墳です。この古墳の発見は、地域の歴史像に新たな1ページを加えることになりました。(古川 匠)

ヒル塚古墳の須恵器

国道1号線の八幡一ノ坪の交差点の南側に、平成の初めまで竹林の高まりがありました。南山城地域を代表する古墳時代前期の方墳、ヒル塚古墳です。ヒル塚の地名は江戸時代にさかのぼりますが、古墳として紹介されたのは、大正8(1919)年のことです。その後、平成元(1989)年に発掘調査が行われ、その内容がわかりました。私もその調査に参加しましたので、よく覚えていますが、古墳の墳丘と埋葬施設の大きさは、目を見張るものがありました。墳丘は一辺52.4m、高さ7.5mで、八幡市内最大規模の西車塚古墳(全長110m・後円部径70m・高さ5m)より高く、墓壙(長辺12m・深さ3.5m)と粘土槨(長さ8m・幅2.4m)は、府内有数の規模をもつ埋葬施設です。

この古墳の墳丘上から出土した遺物に、須恵器高杯4個体と蓋4個体があります。これらは墳頂部の埴輪列に接して置かれたような状態で見つかりました。遺物が竹の根にからんで取り上げにくかったことを覚えています。

須恵器は、5世紀後半のもので、埋葬施設の時期(4世後半～5世紀初め)とは隔たりがあり、報告書では「古墳への埋葬が行われなくなってからも墓上祭祀が行われた」とされています。これらの須恵器を改めて観察しますと、高杯と蓋は、その高さの違いなどから3組6個体と1組2個体のとの間に、形式的な差異(製作上のモデルの違い)をみることができました。また、脚部の透かしが円形を呈する点や、脚部が「ハ」の字に外反しつつ端部が内傾して丸く仕上げている点は、府内では類例があまり多くなく、特徴的です。

このような須恵器の高杯や蓋のセットが古墳から出土する例は、畿内において地域的なかたよりがあるようです。しかし、この状況は定型化した須恵器の古墳祭祀の一つの様相と考えられています。ヒル塚古墳の須恵器の墓上祭祀については、古墳の埋葬が終了してからは少なくとも、40～50年以上の隔たりがあります。そのため、その経緯を古墳の埋葬に求めるよりも、定型化しつつある須恵器の墓上祭祀にもとめることがその理解につながると考えられます。

須恵器を使った古墳祭祀については、近年、八幡市柿谷古墳(一辺12mの方墳)など、南山城地域においてもその例を蓄積しつつあります。今後研究を進めていく上で、大規模な古墳での須恵器墓上祭祀やその特徴的な器形は、ヒル塚古墳の須恵器祭祀を特異なものとして捉え直す一つの視点になるかもしれません。

(岸岡貴英)

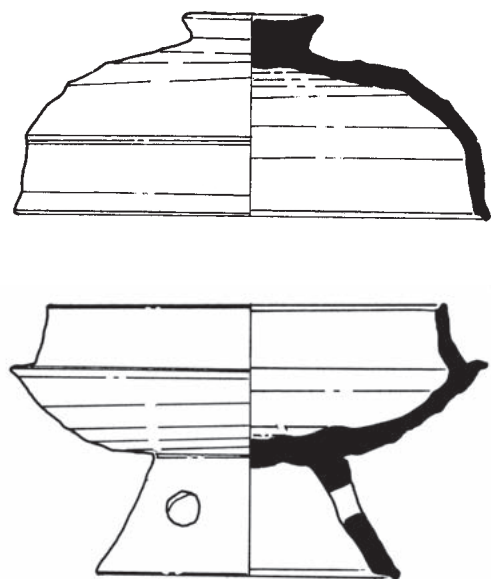


図 ヒル塚古墳出土有蓋高杯(『ヒル塚古墳発掘調査概報』1990 八幡市教育委員会より転載 S=1/2)

桂川右岸地域における古墳時代集落の動向（２）

古川 匠

5. 向日市域北部の様相

これより、桂川右岸地域の各集落遺跡の様相を記述する。今回は向日市域北部を対象とする。

中海道遺跡は、安定した緩斜面と平坦面上に位置する、大規模な集落遺跡である。弥生時代後期の遺構、遺物が検出されているが、弥生時代後期末になると、鍛冶工房を含む竪穴建物跡、大溝等の遺構が大幅に増える。弥生時代後期末の近江系、東海系土器が少量出土している。第32次調査では、古墳時代初頭の、方形溝で区画された大型掘立柱建物跡が検出される。当遺跡は、この時期の乙訓地域で最も有力な集落の一つである。前期前葉から後葉にかけて空白期間があるが、古墳時代中期以降は継続的に営まれる。また、韓式系土器が複数の地点で出土している。

修理式遺跡では、広い範囲で古墳時代の水田跡が確認されている。古墳時代の水田の下層で、弥生時代後期の方形周溝墓や竪穴建物が検出され、景観が大きく変貌した事を示している。

久々相遺跡は、旧寺戸川沿いに形成された集落である。7次調査では、初頭から前期の水田層が検出され、農具などが出土している。生駒山西麓産庄内甕、製塩土器が出土し、調査地周辺に居住地の存在が想定される。中期から後期の遺物、遺構は検出されず、しばらくの間集落が廃絶するようである。再び集落が形成されるのは、飛鳥Ⅳ期である。

野田遺跡は、久々相遺跡の南に隣接し、古墳時代の全期間の遺物が出土する。各調査地点で流路が検出されたほか、左京第471次では前期の水利施設が検出されている。

殿長遺跡は、古墳時代の全期間の遺物が出土するが、明確な居住を示す遺構が検出されるのは後期になってからである。後期の竪穴建物跡と掘立柱建物跡が検出されており、2種類の建物が併存する集落景観が想定される。蛇紋岩玉類および半加工品、韓式系土器、製塩土器等が出土している。Ⅴ期の埴輪も出土しており、居住域に隣接する墓域が形成されていたようである。

古城遺跡は、右京第689次で新たに検出された遺跡である。発掘報告では、仮称としてこの遺跡名が与えられている。小畑川に面する立地で、流路跡から須恵器が少量出土している。

岸ノ下遺跡は、中期には墓域であるが、その後は居住域となるようで、掘立柱建物跡が検出される。建物の詳細な時期は不明であるが、柱穴周辺の遺物の時期から、後期から終末期の可能性が高い。東に隣接する辰巳遺跡は、大部分が岸ノ下遺跡と重複し、同一の集落と考えられる。

森本遺跡は弥生中期から後期の集落として著名である。弥生時代末から古墳時代前期の居住地は不明であるが、この時期の遺物が複数の地点で出土している。遺構としては、長岡宮跡285次地点で、吉備地方の搬入土器を転用した土器棺が検出されている。また、長岡京期の遺構から、



第2図 向日市北部 古墳時代集落分布図(S=1/12,500)(向日市都市計画図)
 (調査次数の略記号は、Pが長岡宮跡、Lが長岡京跡左京、Rが長岡京跡右京を示す)

生駒山西麓産の庄内甕が出土している。中期は遺物が少量出土するが、顕著な遺構は存在しない。後期の竪穴建物跡が検出され、また、詳細な時期は不確定であるが掘立柱建物跡も存在する。

(ふるかわ・たくみ=調査第2課調査第2係調査員)

附表

中海道遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構、遺物	報告書
1次	-	古式土師器(初頭～前期) 埴輪(V期) 須恵器(後期～終末期、飛鳥)	-	向日3
3次	竪穴建物(布留新) 土坑、溝	土師器、韓式系土器、須恵器	-	向日13
4次	竪穴建物(弥生末～初頭) 土坑、溝	-	ピット、柵(奈良)	向日13
6次	土坑(初頭)	-	土坑、溝(弥生後期)	向日13
7次	竪穴建物(初頭、終末期) 溝(初頭) 溝(前期後)	-	掘立柱建物(奈良後半～平安初頭)	向日58-3
8・9次	溝(初頭) 土坑、溝(不確定)	-	竪穴建物、土坑(弥生後期)	向日58-3
10次	-	古式土師器(前期～中期)	-	向日58-3
12次	竪穴建物(弥生末～初頭)	-	-	向日53
14次	-	古式土師器(初頭～前期)	竪穴建物、ピット群(弥生末)	向日60
15次	土坑群(弥生末～前期)	-	大型溝、土坑、ピット(弥生末) 土坑、ピット群(平安)	向日75
16次	円形周溝状遺構、土坑(弥生末～初頭)	-	土坑(縄文晩期)	向日75
17次	竪穴建物(中期後) 竪穴建物(中期後～後期前) 溝	古式土師器、須恵器	自然流路(弥生以前) 掘立柱建物(奈良) 掘立柱建物(平安)	府七概39
18次	竪穴建物(後期中) 溝(終末期) 素掘り溝、土坑	韓式系土器、古式土師器、須恵器	土坑、溝、ピット(中世) 溝、土坑(近世) 弥生土器、石包丁未製品(弥生)	向日60
19次	-	古式土師器(初頭)、埴輪、 須恵器(終末期～飛鳥)	自然流路(弥生)	向日60
20次	土坑(前期)、溝	-	-	向日69
21次	大溝(弥生末～前期) 土坑、ピット群(前期)	古式土師器(初頭～前期) 韓式系土器	井戸、溝(中世、物集女城跡関連施設)	向日60
22次	溝(前期後半～中期末)	-	掘立柱建物(平安)	向日60
23次	流路	-	-	向日60
25・26次	-	古式土師器(初頭)、須恵器	-	向日53
27次	-	-	竪穴建物、盛土遺構、溝、土坑、河道(弥生末) 掘立柱建物(中世)	向日43
29次	土坑、溝、ピット群(弥生末～初頭)	-	柵、掘立柱建物(奈良) 掘立柱建物(平安)	向日43
30次	-	土師器、石製品	柱穴、柵(中世) 平安～中世の遺物	向日60
31次	-	須恵器(TK217)	-	向日47
32次	竪穴建物(弥生末～前期) 大型掘立柱建物(初頭)	古式土師器(初頭～前期)	-	向日44
33次	竪穴建物(初頭) 土坑、溝、ピット	-	溝(中世、近世)	向日60
35次	-	須恵器(中期)	-	向日60
36・44次	-	韓式系土器、古式土師器、須恵器	-	向日60
37次	土坑、土器溜り(弥生末～初頭)	古式土師器(初頭)	-	向日44
38・39次	-	古式土師器(初頭)	-	向日44
40次	竪穴建物(前期末)、溝(～中期)	韓式系土器、古式土師器	-	向日60
42次	竪穴建物(後期中)	須恵器	竪穴建物(弥生末)	府七概77
45次	ピット	-	-	向日69
46次	-	-	竪穴建物(弥生末)、ピット(中世)	府七概81
48次	-	須恵器(TK23)	物集女城土塁(中世)	向日49
49次	竪穴建物(中期)	古式土師器	自然流路(～弥生後期)	府七概89
50次	水田(前期) 包含層(後期)	-	-	向日52
52・54次	小河川、土坑、ピット	古式土師器(前期) 須恵器(後期～飛鳥)	竪穴建物(弥生後期) 飛鳥～奈良の遺物が多く出土	向日67
53次	溝(初頭)、包含層(前期)	埴輪(前期後～中期前)	掘立柱建物(平安時代)	向日71
55次	-	古式土師器、須恵器	物集女城土塁	向日52
56次	-	-	弥生土器(弥生後期～末)	向日60
57次	-	須恵器	-	向日54

修理式遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
1次	流路、水田遺構（弥生後期～前期）、土坑（前期）	-	流路（弥生後期）	向日7・長研報2003
4次	沼状凹地（初頭） 溝、土坑、柱穴	古式土師器、須恵器	土器焼成遺構（弥生）	向日70-2
7・8次	流路（縄文時代～古墳時代初頭） 凹み（後期）	須恵器（TK47～TK217） 古式土師器（前期前葉） 管玉、ガラス製小玉	竪穴建物、土坑、溝、流路（弥生） 溝（長岡京～平安） 溝、轍（中世）	向日70-2
9次	水田関連遺構（弥生後期～古墳）	-	-	向日68
10次	包含層（後期）	-	-	向日71
11次	河道、水路、水田（～前期）	-	-	向日68
12次	溝、流路、水田（前期） 溝、水路（後期～終末期）	-	流路（縄文晩期～弥生） 道路側溝（長岡京期～平安） 方形周溝墓、土坑墓、土坑（弥生後期）	向日75
13次	水田、稲株痕（前期）	-	土器溜り、溝（弥生後期）	向日89

久々相遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
1次	-	-	掘立柱建物（飛鳥Ⅳ～平城Ⅱ期） 掘立柱建物群（長岡京期～平安）	向日60
2・3次	包含層（前期・後期中）	-	-	向日46
4次	-	古式土師器、須恵器	柱穴（中世以前） 溝（中世以降）	向日70-2
5次	流路跡、溝（終末期）	-	溝、落ち込み（長岡京期以前）	向日75
6次	-	須恵器（飛鳥時代）	道路側溝、溝、土坑、掘立柱建物（長岡京期）	向日70-2

野田遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
L142	溝（初頭）、土坑	古式土師器（初頭）	-	向日27
L345	流路（前期～後期）	古式土師器、須恵器（TK73～TK43）	道路側溝、土器埋納遺構（長岡京）	向日62-1
L463	溝、流路（初頭～前期）	須恵器（TK47～TK209）	道路側溝、溝、掘立柱建物（長岡京）	向日62-1
L464	流路、溝（中期前）	須恵器（TK43～TK209）	-	向日54
L471	水利施設、足跡痕跡（前期） 流路	古式土師器（初頭～前期） 須恵器（TK47）	-	向日64-1
L475	流路（弥生後期・後期～終末期）	古式土師器、須恵器（TK23、TK47、209）、製塩土器、木製壺登	-	向日64-1

笹屋遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P316	溝（終末期）	-	道路側溝、掘立柱建物跡、柵、池状遺構、溝、落ち込み（長岡京期）	向日66
笹屋3次	ビット、柵	須恵器	旧河道（旧石器） 溝（中近世・現代）	向日49
笹屋4次	-	須恵器	流路（長岡京期）	向日78
笹屋5次	流路	-	-	向日50

渋川遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構・遺物	報告書
P217	土坑、ビット群、溝、流路（初頭～前期） 包含層（後期～終末期）	古式土師器、須恵器	総柱建物、井戸、土坑（長岡京期）	向日25
P277	-	古式土師器	-	向日41
P369	包含層（弥生後期～前期）	古式土師器	-	向日69
P478	-	古式土師器、須恵器（TK23～TK47）	-	向日89

殿長遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構・遺物	報告書
P92	包含層（初頭～中期）	古式土師器（初頭、中期） 須恵器（TK216～TK10）	－	長研報2003
P160	竪穴式住居跡、土坑、土器溜り、溝、柱穴群（後期）	－	流路跡（～古墳時代）	向日18
P176	竪穴式住居跡（後期の可能性） 土坑、ピット	須恵器（中～後期）	大型掘立柱建物、整地層（長岡京）	向日21
P204	掘立柱建物跡（後期） 包含層（後期）	須恵器（TK216～MT15） 古式土師器、陶質土器	長岡京期、平安前期の建物跡	向日25
P208	土坑（終末期）	須恵器（TK73～TK10）	長岡京期、平安前期の建物跡	向日25
P221	－	古式土師器（前期）、須恵器（後期）	－	向日25
P226	土坑	須恵器	－	向日28
P231	包含層（中期）、沼（弥生～古墳）	－	礎石建物（長岡京） 足跡（弥生）	向日32
P244	－	須恵器	－	向日31
P254	－	家形石棺	－	向日33
P261	土坑	古式土師器（中期）	－	向日33
P264	溝（後期、古墳周濠の可能性）	須恵器（TK208、TK10） 埴輪（V期）、古式土師器	－	向日36
P291	土坑（中期末）、旧河道	古式土師器、須恵器、蛇紋岩製勾玉	－	向日71
P354	溝（後期～終末期） 落ち込み 湿地状堆積	須恵器（MT15、TK217） 滑石製有孔円板	落ち込み（長岡京）	向日49
P380	溝（中期後）、ピット	須恵器、土師器、製塩土器、玉砥石	－	向日74
P390	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、動物足跡、溝（後期）	古式土師器（初頭）、須恵器、韓式系土器、蛇紋岩製玉類、砥石	長岡京期の遺構、遺物多数	向日61
P392	溝（後期初～後期前）	－	築地遺構（長岡京）、溝（中世）	向日52
P441	凹地、溝、ピット、掘立柱建物跡（後期の可能性）	古式土師器（初頭）、須恵器（TK10）	－	向日81
P471	－	古式土師器、須恵器（TK10）	－	向日84

南垣内遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P219	－	須恵器	－	向日25
P473	溝（後期）	－	－	府セ報集140

中野遺跡

次数	遺構概要	遺物	その他の遺構	報告書
P260	竪穴式住居跡（前期後～中期前・後期） 土坑（終末期）	須恵器（装飾器台の可能性）	竪穴住居（弥生後～弥生末）	向日33
P407	柵	－	－	向日58-1

古城遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
R689	流路（後期）	須恵器	祭祀遺物（長岡京）	向日54
R693	流路（後期）	須恵器（TK23）	－	向日58-2

岸ノ下遺跡・辰巳遺跡

次数	遺構概要	遺物	その他の遺構	報告書
P64	掘立柱建物	須恵器（TK47～TK10、TK43、飛鳥）	-	長研報 2003
P270	方墳（中期、7m四方）	須恵器（TK216） 形象埴輪、線刻埴輪	-	向日 36
P332	-	古式土師器、須恵器	-	向日 44
P392	溝（後期後）	-	溝（中世）、築地遺構（長岡京）	向日 52
P64	掘立柱建物跡、包含層、土坑	須恵器（TK23～TK47）	方形周溝墓群（弥生末）、井戸（長岡京）	長研報 2003
P262	-	須恵器・円筒埴輪	掘立柱建物（奈良） 築地、掘立柱建物、柵（長岡京）	向日 75
P268	-	須恵器	-	向日 75

森本遺跡

次数	遺構概要	遺物	その他の遺構	報告書
P47	竪穴、土坑（後期）	古式土師器、須恵器	掘立柱建物（古墳時代の可能性） 掘立柱建物（長岡京）	向日 2
P48	掘立柱建物	古式土師器、須恵器	掘立柱建物（長岡京）	向日 2
P63	包含層（弥生後期～前期）	-	山開古墳	府埋概 1976
P210	包含層（後期～終末期）	古式土師器、須恵器	-	向日 25
P233	包含層（前期～後期） 小土坑、ビット群	須恵器、滑石製模造品	-	向日 32
P249	-	須恵器（TK216～TK208）、埴輪片	-	向日 31
P263	-	土師器（布留新） 須恵器（TK216）	-	向日 36
P283	-	-	竪穴建物（弥生中～弥生後期） 土坑（弥生中）	向日 39
P285	土器棺墓（初頭） 包含層（前期～後期）	-	溝、土坑（長岡京） 溝、土坑、柱穴群（中世）	向日 57
P298	落ち込み、柱穴（中期）	古式土師器（布留古～新）、須恵器（TK208～TK23）	-	向日 47
P301	-	須恵器（TK43）	-	向日 43
P303	流路	須恵器	路面（長岡京） 流路（縄文～長岡京）	向日 51
P306	-	古式土師器（布留古）	-	向日 43
P312	-	土師器（布留新）、須恵器（TK217）	ビット多数（中世）	向日 47
P321	-	須恵器（TK209～217）	溝、旧河道（長岡京）	向日 53
P332	-	古式土師器、須恵器	-	向日 44
P351	流路	須恵器（TK208前後）	-	向日 47
P373	-	古式土師器（庄内）、須恵器、紡錘車	宮城門（長岡京） 流路（長岡京以降） 氾濫原堆積層（長岡京下層）	向日 70 - 1
P388	後期の須恵器片	須恵器	ビット多数（中世）	向日 52
P392	溝（後期前）	須恵器	溝（中世）、築地遺構（長岡京）	向日 52
P396	包含層（後期）	須恵器	-	向日 52
P416	-	須恵器（TK23）	道路（長岡京）	向日 62 - 1
P418	-	須恵器（後期）	-	向日 59
P423	井戸状土坑、風倒木痕、凹地	古式土師器、須恵器、メノウ製勾玉	掘立柱建物（長岡京）	向日 66
P448	-	古式土師器、須恵器（TK47～MT15）	宮内一条条間南小路推定北側 溝、北雨落溝	向日 76
P91024	流路（弥生末～前期前半）	古式土師器	-	向日 37

御屋敷遺跡

次数	遺構概要	主な遺物	その他の遺構	報告書
P 329・P 341・ P 357	溝	須恵器	-	向日 62 - 2

※遺構の時期区分については、弥生時代後期末を（庄内Ⅱ・Ⅲ期）、古墳時代初頭を（庄内Ⅳ期）、前期を（布留Ⅰ～Ⅱ）、中期を布留Ⅲ期～TK208型式期、後期をTK23～TK43型式期、終末期をTK209型式期以降とする。

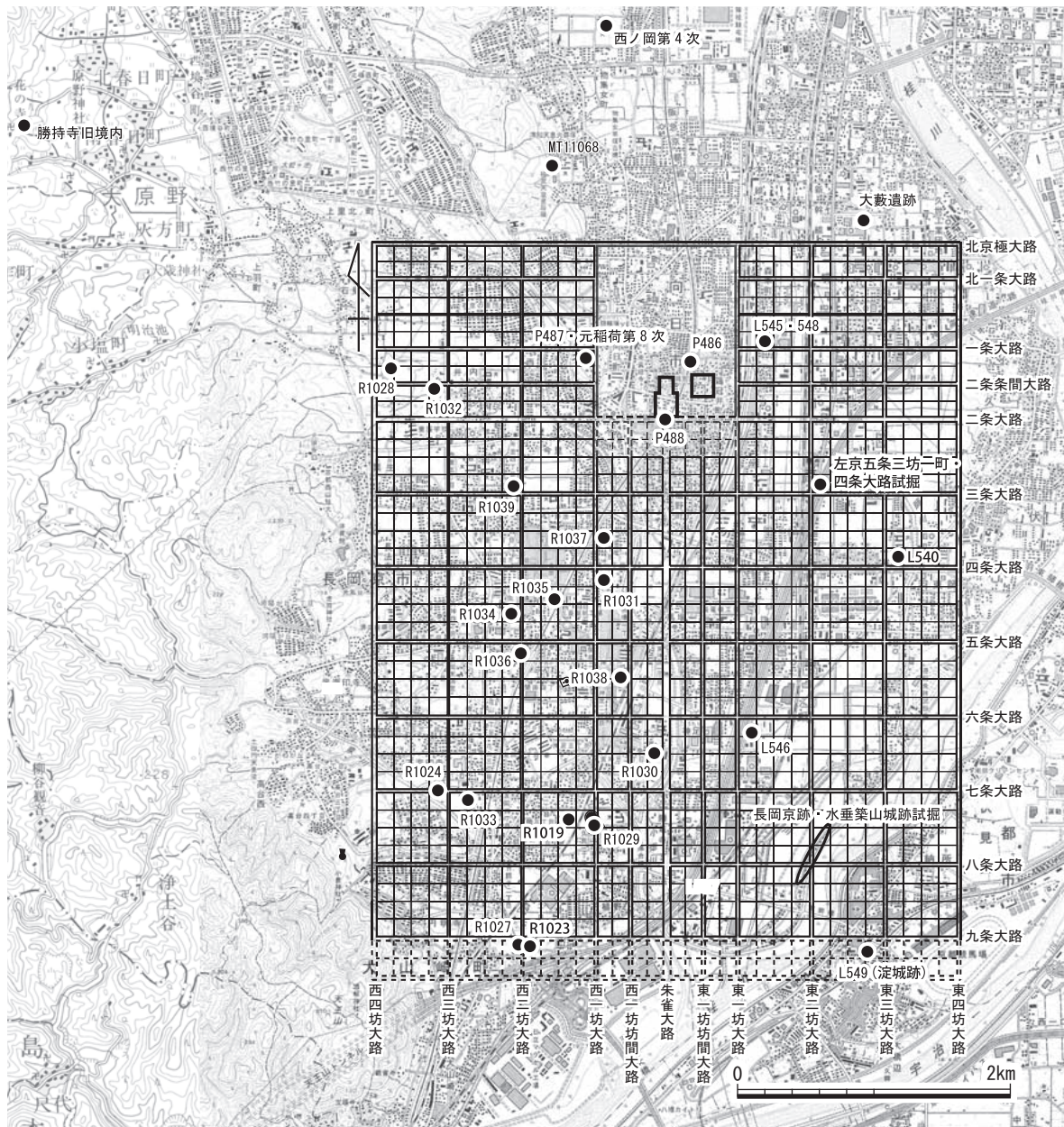
※報告書の略号は、向日…向日市埋蔵文化財調査報告書、府埋概…京都府埋蔵文化財調査概報、府七概…京都府遺跡調査概報、府七報集…京都府遺跡調査報告集、長研報…長岡京跡発掘調査研究所調査報告書を示す。

長岡京跡調査だより・113

長岡京跡発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の横断的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成23年10月から平成24年1月の例会では、宮域3件、左京域6件、右京域16件、京域外5件の合計30件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 第486次調査(向日市鶏冠井町)では長岡京期の土坑と整地層が確認された。

左京域 左京第548次調査(向日市森本町)では長岡京期の溝や土器溜りが検出され、暗渠溝を



調査地位置図(1/50,000)

(向日市文化財事務所・(財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

設けて宅地の排水処理をしていたことが明らかになった。また、下層の石田遺跡に伴う縄文時代後期から晩期の土器群や土器棺が出土した。左京第546次調査(長岡京市神足)では長岡京期の建物群や井戸、溝、土坑などが検出された。建物群は南面に庇を持つ建物が東西に3棟並ぶもので、井戸からは土器のほか瓦や齋串、桃の種などが出土している。また、下層から縄文土器やサヌカイト片が出土した。左京第549次調査(淀城跡、京都市伏見区)では江戸時代及び桃山時代の遺構が確認された。江戸時代(淀城期)については本丸、天守台、東曲輪、南曲輪で調査が行われ、天守台の地下が米蔵であったことが明らかになったほか、石垣や隅櫓に昇るための石組の階段が確認された。また、東曲輪および南曲輪では、米蔵の基礎と考えられる布掘基礎や礎石の根石のほか、米蔵を囲う石垣や溝、前面に広がる路面状の整地等が確認された。このほか堀とこれに伴う石垣が検出され、いずれも明治期に壊され埋められたことが明らかになった。桃山時代(淀城以前)については、淀城築城以前の大坂街道の路面やその両側に広がる町屋遺構が確認された。

右京城 右京第1028次調査(長岡京市井ノ内)では井ノ内車塚古墳群の調査が実施された。墳丘東側のくびれ部と前方部南西隅に調査区を設定して調査を進めた結果、盛土の構築状況が明らかになった。また、埴輪(円筒・朝顔形・家形・石見型)や須恵器、韓式系土器がまとまって出土した。右京第1029次調査(長岡京市勝竜寺)は恵解山古墳の整備に伴う調査で、今年度は前方部西側(土塁部分)と周濠西側の2か所で調査が実施された。調査の結果、前方部西側1段目の基底石と斜面の葺石が確認された。右京第1031次調査(長岡京市開田2丁目)では中世土坑のほか古墳時代の「L」字に曲がる溝を検出した。この溝は右京第995次調査で検出された溝と一連の溝で、古墳を形成するものと考えられ、一辺14mの方墳に復元できる。調査地は開田古墳群に含まれることから、この古墳群の1基と考えられる。右京第1033次調査(長岡京市下海印寺)では8世紀を中心とする土坑や建物跡が検出された。これらは鞆岡廢寺に関連するものと考えられる。甕の1つから萬年通寶や神功開寶がまとまって出土した。その他、遺構は確認されていないが、縄文土器やサヌカイト剥片が出土している。右京第1034次調査(長岡京市長岡2丁目)では中世以降の耕作溝のほか長岡京期、古墳時代の遺構が確認されている。長岡京期の遺構は2時期あり、建物跡や柵、溝、土坑が確認されている。溝には宅地内通路と考えられる平行する2条の溝があり、当時の宅地割りを考える上で注目される。また、出土遺物には愛知県猿投産の須恵器や「月」と書かれた墨書土器などがみられ、これらは居住者に関する資料として注目される。右京第1035次調査(長岡京市長岡1丁目)では新たに古墳の周溝と考えられる溝が確認され、開田17号墳と命名された。周溝は幅3mを測り、円弧状を呈することから方墳ではなく、径25~30mの円墳ないしは前方後円墳の後円部と考えられる。出土遺物から長岡京造営時に削平されたと考えられる。

京域外 大藪遺跡(京都市南区)では弥生時代の溝や棟持柱を持つ掘立柱建物跡、室町時代の溝・柱穴が検出された。弥生時代の溝は2000年度の調査で確認された溝の延長部と考えられ、建物跡はその南東で検出された。同様の棟持柱を持つ建物は今回の調査地の約20m南東で実施された2002年度調査でも確認されている。

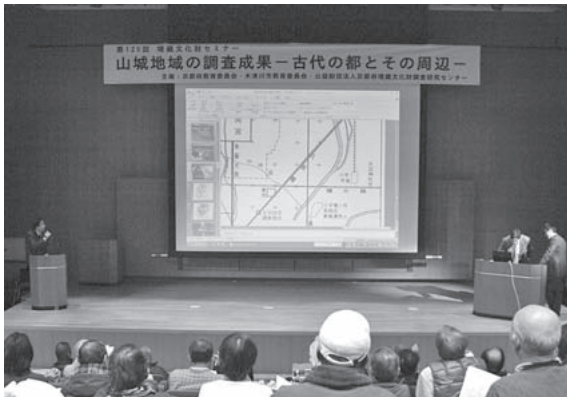
(松尾史子)

普及啓発事業(11月～平成24年2月)

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業により消滅する埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その成果を広く府民の皆様にご報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業(体験学習)等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第120回埋蔵文化財セミナーを、平成24年2月18日(土)に木津川市中央交流会館いずみホールで、「山城地域の調査成果－古代の都とその周辺－」と題して実施しました。当調査研究センターの岩松保係長・増田孝彦主任調査員から「長岡京跡松田遺跡等の調査」と題して報告があり、長岡京跡の2,000回を超える調査・研究成果を踏まえた上で、京域南限に位置する松田遺跡の性格について言及しました。続いて、木津川市教育委員会の永澤拓志主任による「恭仁宮関連遺跡ほかの調査」の報告では、歴代都城の宮域に比べ小規模な恭仁宮の周辺域の調査事例を通じて、その歴史景観を復元されました。また、京都府教育委員会の藤井整副主査からは「恭仁宮跡の調査」と題して、恭仁宮の殿舎配列やその構造の特質を概説した上で、大極殿院の南西隅部にお



第120回埋蔵文化財セミナー(於：木津川市)

ける最新の調査成果が紹介されました。また、会場では、昨年度、豊富な文字資料が出土して内外から脚光を集めた木津川市上狛北遺跡の出土品展示コーナーを設け、墨書土器や保存処理を行なった木簡を合わせて展示しました。

当日は雪空にもかかわらず、82名の参加者を得て盛況裏に終えることができました。

現地説明会

11月12日(土) 椋ノ木遺跡(精華町)で開催しました。縄文時代から中世にかけての複合遺跡である当遺跡の第10次調査で、中世の屋敷地、および須恵器を伴う古墳を2基新たに検出しました。92名の参加を得ました。

平成24年1月15日(日) 美濃山廃寺跡第6～9次(八幡市) 古代寺院の中核部分での大規模な調査成果について、午前と午後の2回に分けて大々的に公表しました。寺院に関連すると思



第120回埋蔵文化財セミナー(於：木津川市)

われる数多くの建物跡や、瓦窯跡、金属製品の生産に関わる炉跡など多彩な遺構・遺物が発見され、内外から注目を集めました。広大な調査地に、433名の多数の見学者を迎え盛大に実施しました(詳細は本号前掲)。

関係者説明会

11月29日(火) 野条遺跡(南丹市)で開催しました。弥生時代後期の溝や平安時代の溝、鎌倉時代の溝が検出され、この地域の耕地開発の歴史を知る成果を得ました。地元の方々40名の参加がありました。

平成24年1月19日(木) 国宝清水寺本堂(京都市)で調査成果の報道発表を実施しました。「清水の舞台」の下部構造を知る上で重要な発見が相次ぎ、江戸時代前半期の巡礼札が確認されるなどの成果を公開しました。



美濃山廃寺現地説明会風景



美濃山廃寺現地説明会風景

関西考古学の日関連事業

関西考古学の日関連事業として9月～11月に4回にわたり、「京都府内重要遺跡再考！」と題して考古学講座を当調査研究センター研修室にて実施しました。第3講座は11月5日(土)に実施され、中川和哉主任調査員を講師に「長岡京市伊賀寺遺跡再考！－縄文集落の立地と構造を考える－」と題された講義が行われ、16名が受講しました。続く11月19日(土)には、第4講座として、黒坪一樹専門調査員を講師に「京丹後市浅後谷南遺跡再考！－清水の取水施設の意味を考える－」の標題で講義が行われ、8名の受講がありました。

(伊賀高弘)



関西考古学の日第3講座風景



関西考古学の日第4講座風景

「関西考古学の日」関連事業を振り返って

「関西考古学の日」は、全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックに所属する11法人が、広く市民の皆さんに文化財や考古学の重要性などを広く知っていただくために、9月から11月の3か月間に限定して実施する連携事業です。今年度で4年目をむかえ、広く知られるようになりました。

今年度の当調査研究センターの関連事業は、4日間で5講座を行い、66名の方々に聴講していただきました。当講座では、過去3回、近年、発掘調査を実施した遺跡に焦点をあてて講座を実施してきました。特に「最新」に拘らず、京都府内の考古学的見地から重要な遺跡や遺物に焦点をあてた構成を心がけてきました。

今年度は、参加者が、より深い理解を得られるように関連遺物や模型の展示を行い、質疑応答においても規模の大きい講演会とは異なり、日常的に疑問に思っている点などについてもやり取りができ、好評でした。また、受付時には開催時期近くに行った現地説明会資料を配布するとともに埋蔵文化財セミナー資料の提供を行い、センター事業についても理解を得られるように配慮しました。特に、アンケートの回収は行っていませんが、関連遺物などを実見できたことや気軽に質問できたことなど、参加者から良好な意見も数多く聞かれました。

しかし、参加者数については、思ったよりのびなかったことも認識しています。要因については、強風雨の天候とも関連したこともありますが、「重要遺跡」のタイトル自体が、やや焦点が散漫となり、具体的なアピールができなかったことも反省材料です。今後も「身近な考古学講座」として、検討していきたいと思っています。ぜひ、足をお運びください。

(小池 寛)

	日 時	発 表 者	テ ー マ	内 容
第1回	9月24日 (土)	筒井 崇史	亀岡市国分古墳群再考！ 〔八角墳と国分寺の関係にせまる〕	国分寺が選地された歴史的な背景を八角墳に求め、検証する。
第2回	10月22日 (土)	村田 和弘	京丹後市俵野廃寺再考！ 〔府内最北端の古代寺院の実像を探る〕	府内最北端の古代寺院を通して、仏教の地方への広がりについて考える。
		小池 寛	京都市平安京跡左獄跡再考！ 〔左獄と都市の土地利用を考える〕	平安京左獄の歴史と都市における土地利用の復元を行う。
第3回	11月5日 (土)	中川 和哉	長岡京市伊賀寺遺跡再考！ 〔縄文集落の立地と構造を考える〕	石囲炉が確認された縄文伊賀寺村の立地条件と集落構造を検証する。
第4回	11月19日 (土)	黒坪 一樹	京丹後市浅後谷南遺跡再考！ 〔清水の取水施設の意味を考える〕	谷からの清水を導水する施設と儀礼について、各地の事例から考察する。

「関西考古学の日」講座一覧表

センターの動向

(平成23年11月～平成24年2月)

月日	事	項
11 5	「京都府内重要遺跡再考！」考古学講座第3回（於：当センター）「長岡京市伊賀寺遺跡再考！」講師：中川和哉調査第2課主任調査員（参加者16名）	
7	森郁夫帝塚山大学附属博物館館長、美濃山廃寺（新名神）現地指導	
10	井上満郎理事・坂井秀弥奈良大学教授、美濃山廃寺（新名神）現地指導	
11	第17回全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋蔵文化財研修会（於：長岡京市）水谷壽克調査第1・2課長、岸岡貴英調査第1課課長補佐、石井清司調査第2課主幹、伊野近富次席総括、戸原和人・増田孝彦主任調査員、筒井崇史・加藤雅士・大高義寛調査員参加	
12	椋ノ木遺跡現地説明会（参加者92名）	
14	平成23年度教育庁役付職員人権問題研修Ⅱ（於：京都市）田中彰調査第1課主任調査員、伊野近富調査第2課次席総括調査員、田代弘次席総括調査員、引原茂治・竹原一彦・戸原和人・増田孝彦・中川和哉主任調査員参加	
15	上原真人理事、美濃山廃寺（新名神）現地指導 長岡京跡・松田遺跡（府道：大山崎町）発掘調査終了（4/19～）	
16	長岡京連絡協議会（於：センター）	
17	小池久常務理事・事務局長清水寺境内現地視察	
18	人権大学講座（於：京都市）小池寛調査第2課課長補佐受講 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議（於：大阪府）安田正人事務局副局長、杉江昌乃総務課課長補佐出席	
19	「京都府内重要遺跡再考！」考古学講座第4回（於：当センター）「京丹後市浅後谷南遺跡再考！」講師：黒坪一樹主査調査員（参加者8名）	
21	増田富士雄理事、三ノ宮東城跡現地指導	
25	植物園北遺跡（京都市）発掘調査開始 長岡京跡・開田遺跡（長岡京市）発掘調査終了（10/24～）	
28	教育庁人権問題研修（於：京都市）今村正寿総務課係長、鍋田幸世・葛本慎太郎主事、岸岡貴英調査第1課課長補佐、田中彰主任調査員、伊賀高弘主査調査員、松尾史子調査員、小池寛調査第2課課長補佐、田代弘次席総括、引原茂治・増田孝彦・中川和哉主任調査員・石尾政信・岡崎研一専門調査員、柴暁彦主査調査員、奈良康正・村田和弘・加藤雅士・関廣尚世・牧田梨津子・山崎美輪調査員参加	
29	野条遺跡地元説明会（参加者40名） 三ノ宮東城跡（京丹波町）発掘調査終了（4/21～）	
30	教育庁人権問題研修（於：京都市）黒坪一樹調査第2課専門調査員参加	
12 1	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会（於：東京）小池久常務理事・事務局長、安田正人事務局副局長出席（～12/2） 緊急雇用対策事業（出土品整理事業）着手	
4	木簡学会（於：奈良市）筒井崇史調査第2課調査員講師派遣	

- 5 大脇潔近畿大学教授、美濃山廃寺（新名神）現地指導
第二外環（川向地区）現地調査着手
- 9 清水寺境内（京都市）発掘調査終了（10/18～）
- 16 椋ノ木遺跡（精華町）発掘調査終了（7/25～）
第二外環（川向地区）現地調査終了（12/5～）
- 19 第2回理事会（於：ルビノ京都堀川）上田正昭理事長、小池久常務理事・事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、増田富士雄、磯野浩光各理事、橋本幸三、清水浩平各監事出席
- 21 長岡京連絡協議会（於：当センター）
- 22 野条遺跡発掘調査終了（8/17～）
山崎津跡発掘調査終了（4/26～）
- 1 15 美濃山廃寺（新名神、府道、八幡市）現地説明会（参加者 433 名）
- 18 人権問題特別研修（於：職員研修センター）奈良康正調査第2課調査員参加
- 24 人権問題特別研修（於：職員研修センター）葛本慎太郎総務課主事参加
- 25 長岡京連絡協議会（於：当センター）
京都府埋蔵文化財調査研究センター中長期経営目標検討会（於：府庁）
小池久常務理事・事務局長、安田正人事務局副局长兼総務課長、杉江昌乃総務課課長補佐、今村正寿総務課係長、水谷壽克調査第1・2課長、岸岡貴英調査第1課課長補佐、石井清司調査第2課主幹、小池寛調査第2課長補佐出席
- 28 文化財講座「京都府内の埋蔵文化財調査、近年の成果について」（於：丹後郷土資料館）
伊野近富調査第2課次席総括調査員講師派遣
- 29 歴史講演会「にそと工事と事前調査で発掘された遺跡群」（於：長岡京市）中川和哉調査第2課主任調査員講師派遣
- 2 2 人権問題特別研修（於：職員研修センター）増田孝彦調査第2課主任調査員参加
- 3 全国埋蔵文化財連絡協議会近畿ブロック主担当者会議（於：当センター）水谷壽克調査第1・2課長、岸岡貴英調査第1課課長補佐、小池寛調査第2課課長補佐
- 7 人権問題特別研修（於：職員研修センター）古川匠調査第2課調査員参加
- 8～9 平成23年度第2回埋蔵文化財担当職員等講習会（於：奈良市）岩松保調査第2課係長、中川和哉調査第2課主任調査員出席
- 10 木津川河床遺跡（八幡市）発掘調査終了（4/25～）
- 14 人権問題特別研修（於：職員研修センター）加藤雅士調査第2課調査員参加
- 16 木津川河床遺跡発掘調査終了（4/25～）
- 17 平成23年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議（於：京都市）、小池久常務理事事務局長、安田正人事務局副局长、杉江昌乃総務課課長補佐出席
- 18 第120回埋蔵文化財セミナー（於：木津川市）（参加者 82 名）
- 22 長岡京連絡協議会（於：当センター）
- 29 緊急雇用対策事業「出土品再整理」業務終了（10/3～）

編集後記

情報 117 号をお届けします。

今年の冬は、全国的に記録的な大雪や低温を記録しましたが、3月を迎えて、日ごとに暖かくなり春の気配を感じてきました。

当調査研究センターは、平成 23 年 4 月をもって公益財団法人として新たな体制に移行して間もなく 1 年が経過しようとしています。この間の調査研究に係る業務も順調に進捗しています。

さて、本号では、本格的に始動しはじめた新名神高速道路の建設に伴う大規模な調査成果の中から、八幡市美濃山廃寺の調査成果を速報しています。また、万葉歌木簡の出土で脚光を集めた馬場南遺跡の燃灯供養の様子を実験的に再現した論考を掲載しました。さらに、シリーズ「乙訓地域の古墳時代集落動向」では、回を重ねていよいよ核心にせまろうとしています。ユネスコ世界遺産であり国宝に指定されている清水寺本堂（舞台）の貴重な調査成果もあわせて紹介しています。今回も盛りだくさんの内容となっています。

（編集担当 伊賀）

京都府埋蔵文化財情報 第117号

平成 24 年 3 月 31 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER